

りとなすものなり。桐一葉にありては、全篇の動作に統一の骨子あり、興味的一致亦おのづから維持せられ、人物の點染、景物の摹寫、亦往々にして詩致あり。蜻蛉、淀君の如きは兎にも角にも出色の人物なりしを失はず。之を牧の方の散漫にして詩趣乏しきに比すれば、實に優秀の作なりと謂はざるべからず。

然り、吾等は『牧の方』を以てまことに詩趣に乏しき戯曲なりと想ふ。

照子の前は如何に是戯曲に於て終始せしか。何ぞ其落寞たるや。七夕の大雷雨は、情景相稱へりと云ふべからず。吾等はむしろ其舞臺上に紛雜騷亂を來したる外、何等の効果あるを認めず。末段目前の琵琶歌、橋殿の一刹那は、事素と好個詩的の資料なりと雖ども、事迫らず、情到らず、徒に蘊藻吹嘔の趣ありて、江湖秋濤の觀無し。牧の方の最後の如きも、亦茫昧突如の嫌なきか。恰も是れ紙窮し墨燥して、更に筆を染めたるもの、

檢括に過ぎて通脱に乏しきは、蓋し免れざるの勢なるか。

以上は備を求むるの餘り其缺點を列ね來りたるのみ。たまく他の美を成さざるに類する無くむば幸なり。蓋し他の著作に對して二三の弊所を抉摘するは、甚だ容易なることなり。讀者は幸に吾等が是批評を以て、直に春のや主人が高著の全價值を標定したるものとす勿れ。夫の白璧の煌々たるもの、時に一塵の影に曇る。主人亦吾等が僭越の言を赦せ。

(三十年八月稿)

坪内逍遙が『史劇に就いての疑ひ』を讀む

坪内逍遙は史劇に關する意見を本月五日發行の早稻田文學に載せ、題して『史劇に就いての疑ひ』と云ふ。其説吾人の見る所と異なるものあり、左に其疑點を擧げて氏並に江湖の教を請はんと欲す。

逍遙が是論は史劇の性質に就いて最も重大なる結論を含む。氏の文、牽引附會に忙はしく、爲に其委曲を審にするに及ばざるを恨とすると雖も、其の究竟の見地は、史劇の目的は史劇眞意を詩化するに存すとの一言に歸着すべし。氏は是斷案に到着するに左の如き論理をたどりたり。

氏は先づ沙翁の半叙事詩的史劇か劇の形式上不具の作なるを認め、而して他の五大悲劇に於ては畧々悲劇的形式に冥投するを得たる沙翁が、何故に特り其史劇に於ては斯る背則の作を爲し、かを訝り、史劇の本領は多少他の劇と殊なるが爲に沙翁の天才は之れを看破し、其の本領を發揮せむが爲に態どかゝる特殊なる形式を取れるにはあらぬかと疑ひ、是形式上不完全なる史劇が、列國劇壇に歡迎せられ、多くの批評家に賞讃せらるゝは、單に因襲の惰力、單に沙翁崇拜の騎虎の餘勢なるかと反問して、暗に先の疑を然定するの意を表はしたり。

氏は次に筆を起して正面より史劇の性質に就いて説を作して曰く。

史劇とは我が所謂活歴劇の如く、正史若くは野史の事蹟を只そのまゝに安排して、正史の地の文を科介に改め、人物の語を的として劇に物したるに非ず。さりとして近松等の淨瑠璃の如く、元和を建仁とし、家康を時政とし、ほしいまゝに史上の名稱を用ひて、ほしいまゝに立案構思せるもの、即ち詩想の自在を得む爲に名のみを過去に借れる空想の作も、正當の史劇とは稱すべからず、前者は劇詩として取るべき所なく、後者は劇詩としては或は取るべきも、史としては一分の取るべき點無きに似たり。詩は史の侍婢にあらねども、史も亦詩の爲に濫用せられて、故なく其名稱を犠牲にせざるべからざる約束無し、史學上に寸功無くしてほしいまゝに史と稱する、亦た一種の妄稱ならむ。

是意見を確かめむが爲に、沙翁批評家ド、デン、及びウルリチを引用し、更にウルリチの言に隨て氏の説を明にして曰く、

史劇の目的は史的事件の隱微なる眞意を描破するにあり。所謂史の眞意は實り倫理的なるのみならず、其倫理的なるところ、やかて其詩的なる所なり。されば史の眞意を描くは、詩の本領に外つれたる事を爲すに非ず、………史には自然の大法に従へる一道の發展あり、是大勢は人

間の存する限り、隠顯弛張して連続し、其因果は綿々として世波の底に起伏し、預め期待すべからず。而して是不可思議なる隱微の因果は一面倫理的として見るべきと同時に、一面詩的として見るべきもの也。否此間に大なる詩的消息ありと言はざるべからず。夫の沙翁が其の國史劇を前後連絡したるものとして作したるは、豫じめこゝに意ありての沙汰なりと斷じ得べきに似たり。

氏は是ウルリチの言によりて、史劇には悲喜劇以外の一種特異の本領あることを斷じ、沙翁の史劇が通常戯曲の例規を離れて形式上不完全の觀あるは、畢竟是本領を全うせむが爲に、故らに適當なる方便を求めたるに外ならずとなし、更に史劇の價值に就ては、

史劇は其性質上のづから劇の正則に背く所無きを得ざるべけれど、其の人間事相の尤も遠大深劇なる隱微を傳ふるの點に於て、他の作の能くし得ざる所を能くし、件の缺陷を補ふて餘りあるに非ずや。

と論斷せり。

是論斷を爲したる後、氏は更に筆路を轉じ、氏が著作にかゝる史劇『牧の方』の形式に對する世評數條を擧げて、一々之を辨解せり。而して是數條の世評を代表するに多く吾人が嘗て本誌に掲げたるものを以てせり。即ち『牧の方』は北條義時を主人公とせる三部曲の一段なるが故に、吾人は是三部曲の形式を以て一切戯曲に缺くべからざる感興の一致を妨害したるものなりとなし、左の如く論難せりき。

○戯曲には一定の形式あり、是れ感興受發の理に本きて、作者須要の制約を成すもの也。○三部曲は希臘以來の一統たるに相違無きも、之を分ては則ち支離、是を併すれば則ち冗贅、人物の數、事件の錯綜、場面の變化、時間の延長、皆共々複雑恣大に過ぎ、到底完全なる戯曲的効果を奏すること能はじ。

逍遙は之に對して直に反問して曰く、

○高論まことに至理なるが如し、只疑ふらくは、此の評は直に移して沙翁の國史劇全體の批難としても恰當なるが如し、如何。

と。吾人は又『牧の方』が場面以外の幾多の史的智識を預想するを難じて、左の如く云へりき。

戯曲とは場に上れる人物の言語と動作とに依りて、過ぎ去りたる事柄をまのあたりに表象する詩歌の一種なり。かく戯曲の中に現はる事柄は、全く曲中の人物のはたらきの中に終始すべき者なるが故に、其由來經過を解せむが爲に、曲外に他の話説、若くは註釋を要するが如き事柄は、また以て戯曲的とは稱し難からむ。我等は常に戯曲小説をば一個の有機體に喩ふ、そは其活動の因縁の、すべて自家により説明し得らるべきを謂ふ也。

氏は是に對して亦直に反問して曰く、

高論まことにことわりなり、予も尋常の悲喜劇に於ては毎に是の如くならざるべからずと思へり、但し此の評は直に移して沙翁の國史劇全編の非難としても恰當するが如し、如何。

是の外氏は性格作意等に關して辨解する所ありたれども、史劇の形式論に關する論點の主腦は是二ヶ條に存するを以て、茲に暫く之を省く。

如上の梗概によりて知らるゝ如く、逍遙は是論の前半に於て、史劇の本

領に就て大體論を爲し、後半に於て其自作の是の如き覺悟に本けることを示して、『牧の方』の形式に對するの批難は、やがて沙翁の國史劇全體に對する批難なることを明にせり。而して是前半に於ける大體論の歸結は所詮左の二條に存するが如し。

- (一) 史劇の目的は史的發展の隱微なる眞意を描破して之を詩化するにあり。
- (二) 史的發展の眞意は、歴代史劇の形式によりて初めて能くし得べし。故に史劇は僅々五七齣を限りとせる他の劇詩の常型に背かざるを得ず。

乞ふ吾人をして氏が是論斷の如何なる程度まで眞理なるかを檢覈せしめよ。

吾人先づ逍遙に問はむと欲す、史劇は史か將た詩か。是簡單なる一問題の決定は、直に氏が論據に向て最も明白なる光明を抛つべし。

史劇、是れ史か、將た又詩か。若し史なりとせむか、徹頭徹尾史的眞

實の圈套を脱するを得ず、史劇と歴史と何の擇ぶ所ぞ。夫の正史の事蹟を安排し、其他の文を科介に改め、其人物の語を臺詞となしたる、今の人所謂活歴劇なるもの、正に史劇の正體なりと謂はざるべからず。史劇若し詩ならむか、一個の美術として詩にはおのづから詩の本領あり、隨て詩の形式あり、一切の資材が其内容たるを得むが爲には預め是本領、是形式に對して絶對的服従を表せざるべからず。是時に當りて詩中に用ひられたる史的事實も亦一の詩的空想たらむのみ。史的發展の真相を示めすもの、世に幾種の歴史あり、史劇に待つ必要なき也。唯劇詩の一體、別に史字を冠するものは、吾人の見る所を以てすれば、史的眞實の發揮を離れて別に用あり。所詮史劇は詩なり、史に非ず。是二者は全然別種の意義を以て結合し、之が主體たるもの常に詩ならずむばあらず。逍遙は史劇の概念に於て、殆ど一にウルリチの説に依傍したるが如し。

然れども氏は一個の重要な點に於てウルリチの説に反きしが爲に自家撞着を醸したるは惜むべし。ウルリチは素ヘーゲル派の哲學者なり。ヘーゲル歿後其凡理論の萬有神教的傾向を擺脫して、一神教的哲學を構成したりと雖ども、其ヒストリスムスに於ては遂に其先人を踏襲せるを免れず、故に史的發展に於ける神の天啓を説き。精靈の實現を信したるの點に於ては、全然ヘーゲル派の眞面目を暴露したる也。其歴史を過重し、一切の事物は史に關して其價値を有せりと思惟したる、亦怪むに足らざるなり。彼れの史劇を觀するや、言ふまでもなく是の點よりせり。故に史的發展の隱微なる眞理を以て、理想の發現なりとし、更に茲に理想の發現として、詩と史との一致を認めたる、素より其所ならず。故にウルリチは史劇を解釋するに他人の有する能はざる便利なる立場を有せり、何となれば彼にありては史も詩も共に理想の發現なるが故に、其

間に自然の融合一致の存在したればなり。故に史の眞意を描くは即ち詩の精神を寫すなり。故に『史の眞意は實に倫理的なるのみならず其倫理的なるところやがて其詩的なる所なり』故に彼れにありては史即詩、眞の史劇即ち是れ眞の劇詩なり。故に曰く。

詩が史的理想を取るは、即ち是れその正當なる所有を取るべきなり。詩が史的事實に依傍するは（勿論、事實が理想を表現する限りに於て）即ち是れ自家の法則に事ふる也。自ら歴史に調攝するは即ち是れ自家の本領及び目的に隨ふ也。

(In taking up the historical idea, Poetry is only taking possession of its rightful property ; not attending to the historical subject-matter, so far as the latter expresses the idea, it is but serving)

to its own laws ; in accommodating itself to history, it is but serving its own nature and purposes
ウルリチは是の如き自家の純理哲學に胚胎せる詩史一致の設想より、沙翁の歴代史劇がなせる劇詩的形式の蔑視を是認せり。彼が是説の是非は、ヘーゲル派が純理哲學の荒唐にして信憑するに足らざることの知れ

渡りたる今日、更に尋究するの要なしと雖も、一個の説としては、兎も角も首尾一貫して其調和を得たりと謂はざるべからず。

吾人は初め逍遙が自家の説を立せむが爲に、一言の批評的注意なくして、全然ウルリチの説を引用し來りたるを見て、或は氏が何時の間にかヘーゲル派の哲學を信奉せるに非ざるかを疑ひき。是『不可思議なる隱微の因果は、一面倫理的として見るべきと同時に一面詩的として見るべし』と云ひ、『史劇は一面に於ては叙事詩よりも深く、一面に於ては家庭劇よりも廣く、其の人間事相の尤も遠大深劇なる隱微を傳ふるの點に於て、他の作の能くし得ざる所を能くし、形式上の缺陷を補ふて餘りあるに非ずや』と論ずるを見て、其詩史一致論をば那邊より把握し來れるかを叩かむと欲したりき。然れども氏の周到緻密なる論理頭は、是の如き大膽なる設想を信じ得ざるべきを想ひ、更に氏がウルリチと共に引用したるド

デンの語と、『牧の方』を公にせしは三部曲の如き特殊なる形式上に一種の詩趣あるを信じたりとの氏の自白とに顧みて、氏の意見の詩史の一致よりは、寧ろ兩者の調和に存することを臆測せり。吾人が氏の史劇論の歸結の第一條として、『史劇の目的は史的眞意を描破して、之を詩化するにあり』となせしは、是を以てのみ。詩史一致論の立場より見る時は、史的眞意即ち是れ詩的本領なるを以て、『之を詩化する』の一句は、畢竟贅疣に屬す。只夫れ詩史の分離を調和するの必要ありて茲に初めて詩化の用を見る。

逍遙にして、若し其一意祖述したるウルリチと共に、ヘーゲルの歴史論の立場に住まるものならむには、徹頭徹尾、詩史一致論を執らざるべからず。而して、史的発展の理想、即ち是れ詩的精神に外ならざるを以て、史劇の中に認識する所の詩趣は其内容上に存せざるべからず。然る

に氏は是重要なる契點に於て、全くウルリチとは別種の意見を抱けるもの、如し、氏の言に曰く。

『桐一葉』を著はし、『牧の方』を公にするや、其劇詩としての價乏しきことは、予みづから之を知れりき。其形式上の缺點は若し之れを矯正せむと欲せば、(予にして改めむの心あらば)之を正すことも難からざりし也。されども、予は其特殊なる形式上に一種の詩趣あるを信じたりし故に、敢て美學家の説に背きて、竊かに初めより數段曲を作らむの腹案を抱きたり

此を以て是を見れば、氏は史劇の詩趣を以て、其劇詩の常規を離れて統一なき叙事詩的形式上に存せりと思惟せりし也。氏は詩の内容の最も醇粹なるもの、即ち史的発展の理想に詩趣ありとなす所のウルリチが説をば、全く其形式に關して解釋し、是參差起伏、散として統一なき形式上に詩趣存すとなせるなり。是れ明に詩史の分離を認めたるものに非ずや。而して是分離論は、氏が些の異見を挾むこと無くして引用したるド

ドーデンが言によりて、更に一層の分明を加へたるが如し。ドーデンの言に曰く、

劇詩をして眞の史劇たらしめむとせば、史の皮相の事實に執着して、其本領たる劇詩の生命を妨退すべからず。劇詩の法則は正史の事實よりも重すべき也。二者相容れざる時は、後者を棄て、前者に従ふを至當とす。されど二者能く兩立し得べくむば、決して其のいづれをも犠牲とすべからず。史に忠實なることは、尠くとも其の作を圓滿ならしむるに肝要なり。

是れ明に詩史の分離を認め、劇詩の法則の正史の事實よりも重すべきことを説き、随ふて是二者相容れざる時は、劇詩の法則に忠ならむか爲には正史の事實に背戾するを辭すべからずと主張せるものなり。是れウルリチのとは全く反對せる説に非ずや、逍遙若しドーデンの語を更に數行の後まで引用したらむには、是反對は更に一層明亮なりしなるべし、即ち彼れ（ドーデン）曰く、

沙翁の技巧上の大手腕は、殊に史的事實と劇詩の法則との調和に表はる。而して『ジョン王』が

歴史として他の國史劇に見劣りせらるゝは、劇詩の法則が要するよりも多く、正史の事實に執着せざりしが爲のみ。

吾人は逍遙が是の如き全然背馳矛盾せる二様の意見を臚列して、均しく賛同の意を表したる眞意の那邊に在るかを知るに苦むと雖も、吾人は前に述べたるが如き臆測によりて、氏の旨趣の存する所は、むしろドーデンと共に、詩史調和論にあるべきを信する也。

逍遙にして果して、吾人の思惟するが如く、詩史調和論を執すとせば、次に來るべき疑問は、是二者の孰れを主とし、孰れを賓とすべきやにあり。二者能く兩立し得べくむば、誰かその一を犠牲として強ちに偏頗の譏を招がむや。然れども史は詩の法則通りに發展する者にあらず、よし是ありとするも是の如き場合は、所謂絶無希有の例ならむのみ。史と詩との衝突は原則としては遂に避くべからざる也。逍遙は是場合を如何に

裁斷せんとするぞ。

ドーデンは明々地に詩法至上主義を唱へて茲に其論點の統一を求め得たり。ウルリチは由來詩史の衝突を認めずして、却て其一致を認めたるを以て、其間素より主客の別なく、調和の勞無し。然れども逍遙は、苟も自らヘーゲルの歴史哲學の立場に在ることを告白せざる限りは、決して是の如き大膽なる神秘的意見を有するものと認めらるゝを得ざるべし、氏が一面に於てドーデンを紹ぎ、他面に於てウルリチを述べたるは、所詮論理の混亂と思想の朦朧とを示めしたるものに過ぎずと雖も。是詩史衝突問題に關しては遂に究竟の論斷を與へざるべからず。吾人は氏が一層精透なる意見に接せむことを樂む。

然れども吾人をして更に氏の説を揣摩せしめよ。氏は素よりウルリチが説を祖述して其根本たる哲學主義に及ぶものには非ざるべし、唯何か

なしに、史的發展の真相に詩趣あることを認め、而して是詩趣を發揮し、
『人間事相の尤も遠大深劇なる隱微を傳ふる』を以て史劇の本領となし、
而して是本領を以つて其形式の缺陷を補ふて餘りありと思惟したるなら
む。形式の缺陷は詩法の忌む所、而かも史的真相の發揮は是損失を補充
して餘りありとなす。之れ明に詩史の一致を認めざるの見、ウルリチが
史的理想の上に何等完全の詩形を認めざるのとれのづから其趣を異にす。
是點に關しては、氏はドーデンと共に詩史の兩者を以て各々其獨立の範
疇を有し、獨立の法則に従へるものとするなり。然れども、史を主とし、
詩を賓とするの點に於ては、氏はドーデンを去りて、ウルリチに就きた
るものゝ如し。要するに、氏か説は二者の折衷と見て大差無からむか。
唯後文歴代史劇の詩趣は、其内容たる理想に存せずして、却て其特殊な
る形式に存すと言ひて、左なきだに如何はしき論理の一致をば、全然破

却し了りたるは、氏の爲に殊に惜むべしとなす。想ふに之れ淺墨の誤謬に過ぎざるべきか。

上來述べ來りたる所によりて、吾人はほゞ逍遙が史劇論の性質を領會し得たるが如し。氏は第一詩史の獨立を認め、第二史劇に於ては史を先にして詩を後にしたり、吾人が含蓄的批評を去りて超絶的批評に移るに當り、先づ再び劈頭の疑問を提起して逍遙の明答を乞はざるべからず。曰く。史劇は史か、將た詩かと。

史劇は史か、將た詩か。逍遙は其必然なる論理的結果として、史劇を以て史と爲さざるを得ざるべし。何となれば、氏は劇詩の法則に背戻して史的發展の隱微を傳ふる、是れ史劇の本領なりと明言したればなり。

良しさらば史劇を以て假に史なりとせむ、然れども吾人は更に請ひ問はむ、所謂史的發展の隱微を傳ふるもの、歴史哲學、若くは人文史と史

劇と孰れとか勝れたるぞ。人文史の目的は、人類社會一般の發達を其精神的方面より觀察し、其外面に現はれたる政治、經濟、宗教、文藝、その他もろくの事物に對して、其成立變遷の説明を與るにあり。極り無き局面の變化を通じて。動かざる發達の原理を究明し、人類活動の主腦を把へて、縦に是を歲時に繋げ、横に是を方處に照し、精神的及び物質的の全範圍に亘りて、社會發達の真相を描破するにあり。所謂『人間事相の尤も遠大深劇なる隱微』とは人文史の對象とする所を外にして何處に存すべしとするか。史劇の本領果して是史的發展の隱微を傳ふるに在らば、而して是目的を達せむが爲には劇詩の法則の如きは顧みるに足らざらむには、史劇家は何か故に科介、臺詞、舞臺上の約束、脚色、修辭等もろろの詩的繫累を打破し去りて、一向何ぞ直に人文史を著さざるや。吾人は史的發展の隱微を解せむが爲には人文史を有す。何ぞ更に史劇を要せ

むや。史劇家よ、乞ふ輕々しく、『史的發展の隱微』を言ふを己めよ。史的活動の係はる所、悠遠廣大、其隱微と云ひ、精神と云ひ、理想と云ふもの、人文萬般の形式に對して、慎重細心なる科學的攻究を施したる上に非ずんば、如何でか會得するを得べき。之れはた人文史が今日最高至難の科學たる所以にあらずや。所謂隱微なるもの、五七齣もしくは五七段の史劇、若くは史劇の連續によりて其解釋せられ得べしと思惟するが如きは、畢竟詩人もしくは詩人的批評家の空言のみ、思想の單純殆ど他に比すべきものを見ざる也。

史劇を以て史的發展の隱微を傳ふるに在りとするの論は、學說として立ち得べきものに非ず。逍遙は、進でウルリチが詩的一致の歴史哲學を奉する能はず、退てはドーデンと共に詩主史從の説に執着すると能はず、好で自らはの明白なる矛盾の中に困頓するに至りたるは、惜みても猶ほ

餘りあり。而して尙ほ沙翁の壘に據りて、批評家の彈射を避けむと擬す。吾人竊に氏が平生の謙讓に省ざるものあるを疑ふ。良し然らば、吾人は更に進みて是の城壁の如何ばかり強固なるかを試みむ。

今や吾人の説を述ぶるの機會に達したり。吾人は史劇(及び歴史小説)の本領に關して、我畏敬する逍遙と大に其見る所を異にするを悲む。先に、『牧の方』を評するに當り、吾人いさゝか是意見を述べて左の如く曰へりき、

戯曲にまれ、小説にまれ、もと空想によりて人を娛ましむるを旨とするものから、明に吾れ人の確實なる知識に背くものは、吾れ人の眞實なる同情を惹起するに頼りあし。そは同一の名稱、もしくは形式の下に、全く異種の内容を含ませむことは、やがて人心の統一に反すればなり、されば何人も熟知せる史上の事實をば、明らかに作り換へて、以て戯曲の資料となさむは、戯曲家としてひとく拙なき業なるべし。さらばとて一々史籍にたどりて、眞を寫すことのみ務めなば、戯曲は遂に成り難からむ。歴史は詩學の法則通りに經過するものに非ざればな

り。然らば全たく空想によりて事例を假作せむか、是れ所謂世話物に於て寫し得べきも、時代物には施し難きが常なり。それを如何にといふに、時代物は其資料として外面的形式の廣大なる事件を要するを以て、歳時と方處とに於て限られたる史的事實か、若しくは有史以前の傳説に據るに非ざれば、吾れ人の依信を繋ぐに便りあしければなり。云々。

吾人の見る所によれば、詩は其詩たる性質上全然空想の美術たるべきものなり。劇詩の類に史劇なるものある、吾人素より之を認む。然れども其人物事件等は正史中の人物及び事件として用ひらるべきものにあらず、其一度び詩中の物となるや、茲に全く史的眞實との約束を遮斷せられて、偏に空想の料として拈貼せらるべき也。是の如きは劇詩の獨立、詩法の權力の必然なる要求なり。是點に於ては全くドーデンと其見る所を同らす。苟も詩的法則の獨立を妨げざる限り、に於ては、一切の事物其資材となるを妨げず。何ぞ獨り史のみに限るべき。苟も詩的法則の要求

に乖離するものは、一切の事物其資材となるを得ず、何ぞ獨り史のみに限るべき。人動もすれば謂へらく、苟も史にして史的といふ殊稱を有し得むが爲には、其史的主题に於ける史的眞意を發見せざるべからず、隨ふて善く當代の人情風俗を觀察して、其眞實に違はさらむを務めざるべからずと。之れ取も直さず、詩形を備へたる歴史のみ、是の如きは初めより正史を取るに如かざるなり。夫の史劇、もしくは歴史小説によりて當代の人情風俗を見むことを望むものは、其標的とする所詩に非ずして史なり、何にぞ初めより人文史もしくは其他の史乘を繙かざるや。逍遙謂へらく、

詩は史の侍婢にあらねども、史も亦詩の爲に濫用せられて故無く其名稱を犠牲にせざるべからざる約束無し。史學上に寸功無くして、ほしいまゝに史と稱する又一個の空稱ならむ。

之れ何たる奇論ぞや。名目の争は當眼の詩論と何の關する所ぞ。氏の論

法を擴張せば、小説は小なる説ならざるべからず、レーゼドラマの如きは言語上矛盾の名稱たるを免れざるべし。是の如きことを争ふは殆ど兒戯に類せずや。遮莫史なる名稱がしかく神聖にして犯すべからざるの理由はた何こにかある。

吾人の見る所を以てすれば、史劇と稱する劇詩の一種が、物類萬種の中、特に史的事實を資料とするは、他の故あるに非ず、主として劇中の事件の『實らしき』を維持せむが爲のみ。

夫れ人情は虚偽に動かさず、一切の文學が人心を動かし得べき第一の制約は、實に其『實らしき』にあり。其外面の形式のみより之を見れば、自然世界に有り得べからざる幾多の瑰奇夸大を包有するにも係らず、巧妙なる詩歌がしかく人心を感動し得るは其内面的精神の逼真自然、即ち茲に所謂『實らしき』ものありて、知らず識らず吾人の肺肝を把摭する

に依る。今夫れ劇詩は縦に抒情詩の幽情微韻を捉へ、横に叙事詩の宏壯偉大を攝り、以て過去に於ける人生の活動を現在の舞臺に演出せむと擬す。其感興の大いなるを得むが爲めには、自ら事局の大いならむを必ず、是際劇的動作の『實らしき』は如何にして支撐せらるゝとを得べきか。其内面的精神の自然發展は、其動作の『實らしき』に缺くべからざるは勿論なり。然れども是れのみにては足らざらむ。そは家庭的劇詩の事、一私人に係るものならむには、其歳時方處は之に關する固有名辭と共に。全く空想の所生たるを妨げじ、而かも事例令へば邦家の興亡にあづかり、英雄の運命にかゝるが如きものならむには、正史の保障を待つに非ざれば吾人の依信をつなぐに頼りあしからむ。何となれば吾人が有せる過去の智識にして、苟も邦家の大事に關するものは正史之を填充して、又尺寸の遺漏を貽さざればなり、是を以て劇詩にして壯大なる

事局を描破せむと欲するものは、勢ひ史劇の形式を取らざるを得ず。故に吾人は信ず、史劇は一派の學者等が思惟するが如く、史的發展の隱微を傳ふるを旨とするものに非ず、隨て當代の人情風俗等を體現するを尙ふべきものにも非ず、其名稱(及び或場合に於ては事實)を史上に借るゝは、只劇的動作の『實らしさ』を支撐する所以の方便のみ。

然らば史劇家は其如何なる種類の正史中に其資料を求むべきか。之れ本論の主題に非ずと雖も。序なれば簡単に吾人の意見を述べむ。即ち歴史上顯著の事實にして、而かも其由來因縁の埋滅せるか。精しくは、其首尾、殊に其の落着の悲壯なる形跡のみ著しく世に知られ、而かも其經行の餘りに通常人に明ならざるが如き事實を以て、最も恰當なる史劇的資料とすべし。是の如くなれば、一面事實の『實らしさ』を失はず、而して一面自由に其詩想を構へ、事例を拈視することを得べし。

レッシングが是點に關する説は、一見吾人のに反するが如しと雖も、其實他の方面より略と吾人と同一の意見を吐露したるなり。其言いさ、か世の史劇論者の蒙を啓くに足らむか。彼れは先づ史は全く詩に隸屬すべきものなるを説き、次に、詩人は如何なる點まで正史の事實に拘はるべきかを論じて曰く、

詩人が一の史的事實を資とするは、是の如き事實が單に興りたるが爲にあらず、唯當眼の目的に對して、空想の所生も之に優る能はざるが如くに興りたるが爲なり。……歴史を依信するに足れりと思はしむるは、何者の力か。そは内部の『實らしき』にあらずや。然らば即ち是『實らしき』か、全く何等の證據もしくは傳説によりて確實にせられずとするも、將た又今日未だ吾人の知識の到達する能はざる程のあらゆるものによりて立證せられたりとするも。そは何れにても等しからずや。夫の演劇が英雄の事蹟に據はるを必とするは謂はれなき事ならずや、是の如き歴は史の務なり、劇のあづかり知る所に非ず。吾人が舞臺の上に學ぶべきことは、此の人、若くは彼の人が何事を爲したるかに非ずして、或特殊の性格を有せる各人か、或特殊なる

境遇の下に何事を爲すべきにあり。故に詩の目的は史のそれよりは遙に哲學的なり。夫の劇を以て英雄の讚辭と爲し、又は國民の自負心を鼓舞するの用に資するものは、是れ劇の威嚴を墮すものと云はざるべからず。

(Humb. Drammat. 19. Stück 3. Juli 1767)

レツシングは内面的眞理を重じたる餘り、一切史劇を用無きものに貶し去りたるは、吾人が劇的事件の『實らしさ』を支撐するの方便として之を保存すべしと説けると多少の差ありと雖も。詩史關係の根本的問題に就いては、全く吾人を見る所を同ふす。吾人はレツシングと共に沙翁の史劇に就て英國史を學ばむとするともがらの迂濶を笑ふもの也。

吾人の畏敬する逍遙は、其形式に於てはむしろ缺陷多き沙翁の國史劇が今尙ほ列國の劇壇に歓迎せられ、多數のシエークスピリアンに激賞せらるゝを見て個中必ず是缺陷を補充して餘りあるの價値存すべしと信じ

而して是の價値は『人間事相の尤も遠大深劇なる隱微を傳ふ』るの點に存すと爲し、更に進みて是覺悟を以て其史劇に筆を染めたりと云ふ。吾人學尙ほ淺く、未だ沙翁が十二史劇の全體を讀破して、其所謂史的發展の隱微なる者を感傳し、逍遙と共に其神韻を贊美する能はざるを恨みとす。然れども之を諸々批評家の言に聽くに、彼等の何人か五大悲劇を超て國史劇を賞讃したるとありや。沙翁當代の英國は丕基漸く定まりて、國民的感情の昂揚殆ど其頂點に達せり、國史劇は是國民的意識の結成を體現したるもの、やがて是れ英國人を喜ばしむべき好題目に非ずや、加ふるに八面往く所として可ならざるなき沙翁の大手腕を以てす、タレシダ、カリオラナスを激賞するの批評家は何を厭ふて之を貶すべき乎。然れども彼等の何人か其形式の缺陷を認めざるものぞ。レツシングがコツドシエツドの佛蘭西崇拜に反對し、沙翁を以てコルチーユの上に置きたるの理

由は、其形式にあらすして、其精神にありき（文學書翰十七）。其史的眞理を發見せよと唱へたるヂルテールが劇詩説に對せる彼が論難は、直に移して沙翁の史劇に擬すべかりき。フライタツハは英國劇詩が獨逸に齎らしたる脚色の弊を以て、一部は沙翁の史劇に歸したりき。吾人は逍遙に反して沙翁を云々せむと欲する者に非ず、然れども沙翁の國史劇が賞讃せられたるの故を以て、一向に其不完全なる形式をも併せ摸倣するの可なるを見ざる也。若し沙翁が國史劇の價値は、逍遙が思惟せし如く、所謂史的隱微を傳ふるの點に存せずとせば如何、英國當代の一沙翁にして初めて成し得べく、後世沙翁に十倍するの大天才も施すに由なき、或一種の事情の纏綿せるありとせば如何。況むや國史劇は沙翁が上乘の劇詩にあらざるの事實は即ち國詩劇の中、自ら沙翁の天才を拘束し、妨害し、他の五大悲劇の如き大成功を爲すを得ざらしめたる事情の存在を意味す。

るものに非ずや。逍遙好むで是難局に投じ、以て其詩材を試む、壯は即ち壯なりと雖も、却て自ら功名の前途を杜絶するものに非ざる乎、吾人潜に氏の爲に惜まざるを得ざる也。

終に臨み沙翁の國史劇に對するハルトマンの批評を聽かむ。其識見流石に讚美感嘆之れ事とする紛々たる凡評家と異なるものあり、敢て逍遙の精讀を請はむ、曰く、

眞の劇詩的經過、場面、及び側話あるにも係らず、カルドロン及び沙翁の史劇は、叙事詩的劇詩と名くるを至當とす。之れ是等の作に歳時及び方處の一致の欠けたるが爲にあらすして、筋の一致、及び一貫せる振張及び昂揚の欠けたればなり。即ち猶ほ希臘劇詩が主として抒情詩的軌制を示めすが如く、是等の作は叙事詩的軌制を表はせばなり。……げにや沙翁は其の當時英國劇壇の根柢を成せる神秘劇の装置を超越し能はざりし如く、是の如き劇により惡まれたる叙事詩的軌制を解脱する能はざりし也。故に是忠慮なくして單に沙翁を摸倣せるもの、失敗するは、是沙翁にありてのみ容認し得べき叙事詩的散漫と支離とを併せて摸倣するによる。ゲ

テの『ザッツ』グナツムの『百日』は是例なり(ハルトマン美學卷)
二七五九一七六〇

.....Sind trotz wahrhaft dramatischer Anläufe, Scenen und Episoden noch die Historien Calderon's und Shakspeare's epische Dramatik zu nennen, nicht weil ihnen die Einheit des Orts und der Zeit, sondern weil ihnen die Einheit der Handlung und ihrer durchgehenden Spannung und Steigerung fehlt, d. h. weil sie noch eine wesentlich epische Komposition zeigen, ebenso wie das hellenische Drama eine wesentlich lyrische Komposition zeigt.....So wenig Shakspeare über die der englischen Bühne seiner Zeit zu Grunde liegende Einrichtung der Mysterienbühne hinauskonnte, ebensowenig über die wirkp ische Komposition, die durch diese Art der Bühne begünstigt.....
Altkritiklose Verhimmelung und Nachahmung Shakspeare's scheitert daran, das sie diese bei ihm verzeihliche epische Zerfalltheit und Zersplitterung der Komposition mit nachahmt.
(Z. B. Goethe's Götz, Gräbe's hundert Tage).

是外史劇に關して言はむと欲するところ多々ありと雖、文長きに過ぐるを恐れ茲に筆を擱く。本文論ずる所は史劇の本領より延いて詩史二者

の關係に及ぶ。蓋し詩學及び美學上の一大問題なり。吾人は茲に鄙見を陳して逍遙の再思を煩し、併せて先輩諸氏の意見を聞かんことを望む。

(三十年九月稿)

歴史畫題論

(一) 序論

世に形體色彩の苟も眼に觸るゝもの、一として繪畫の題案と爲り得ざるは無し、四海の大、一葉の細、何れか畫家藥籠中の物ならざるべき。夫れ唯その畛域、視官の天地に止る、されば聲響に縁りて情を抒べ難く、言語に依りて思ひを傳ふるに由無し、況んや繪畫顯はす所の形象は、横に方處の分別あれども、縦に歲時の經過無し。事を叙し、想を展ぶるに於て、足らざる所ある、言ふまでも無き事也。

されど古より大なる畫家は、一面の世界に安せず、形體色彩の上に

表はれたる不動の感興に慊らで、尙ほ是の超ゆべからざる畛域を打破し、進みて音楽詩歌の範圍に入りて、それが時間的意義を撮容せんことを務めたり。美術史上に所謂尙古派と中世派の消長は、所詮是進境に外ならざるが如し。げに書を以て直に無聲の詩に即せむは誤りならむ、二つの者は其材料に於て、全く類を異にすればなり。されど、若し一面の畫幀能く三世の業果を明にし、詩人の列章重篇にして初めて表はし得たる所、盈尺の紫黄、好く是を盡し得ば、無聲の詩と爲す、寧ろ其美に稱はざるを恨みとすべし。古より歴史畫家が、其の畫題の摺摺に苦心する、主として是れが爲也。

實に是れ畫家の苦心を要する所なるべし。繪畫は空間的美術として、契點 Moment の唯一ならむを必とす。若し其契點を二三にするをだに憚らずんば、十章の詩史を一畫の中に收めむも、恐らくは、容易なる爲

ならむか。唯そが繪畫の美を没し了れるを如何にすべき。斯る例しは、東西を通じて古代の繪畫に多きと、美術史家の善く知る所なり。批評家中、或は是困難を如何とすべからずと爲し、契點の唯一と、時間的意義とは、繪畫に於て相容れ難きを説けるものありき、されど文藝復興期以後の諸大家が、幾多の靈妙なる作品によりて、事實の上には杞憂を排斥し、以て繪畫の將來に最も多望なる一生面を開きたるは、蓋し美術史上の一偉觀なりと謂ふべし。

繪畫に於ける時間的意義は、動作畫 Handlungsmalerei にありては、事件の経過となり、心情畫 Stimmungsmalerei にありては、性格の發展となる。是を歴史に觀るに、前者は古代より夙に畫家の注意を惹起し、其未熟の題案と技工とによりて、尙ほ不斷の精進を懈らず、近世に至りて漸く完全の域に近きたり然れども後者に到りては、其畛域の開拓近世に

屬し、前途尙ほ茫として未だ知るべからず。蓋し一個の觀念を比喩的、若しくは記號的に、形體の上に表はさむは割合に容易なるべきも、而かも一個の歴史的人物を取て其性格を體現せむは、甚だ難き事ならむ。何となれば、斯る人物にありては、其性格の根據は一に歴史の中に存すればなり。そは其性格の發展の強ちに解し難しと謂ふのみに非ず、又是の發展の經行を顯現するの困難なるを謂ふなり。今假りに某の方處、某の歲時に於ける某の心情を描寫するとせよ、其心情の表現は、其性格開發の一契點たらざるべからず、性格開發の一契點たる以上は、既に開發したる過去の心情と、將に開發せむとする未來の心情との中間に立ちて、其必然なる楔子とならざるべからず。是に於てか、其性格開發の全經行の基礎となれる根本性格を表はすの外、更に往を收め、來を披かむとする一分活動の氣勢を示さざるべからず。是の如くにして、初めて三世の業

果、一面の畫幀に表すを得べし。歴史的な心情畫の精英、亦是に存するを見る。

歴史畫は一個の場面の中に一個の生命を顯はさざるべからず、過去を顧眄し、未來を想望し、而して自らは永遠の靜止を保つ

是れ十八年前に没し、『パリの裁斷』を以て有名なる獨逸の歴史畫家フオイエルバッツハの言なりき。

繪畫の題案や、素より一にして足らず、萬千の物類に應じて不言の妙を托する所、俄に其高下を斷じ得べくもあらず。而かも歴史畫の、動作の經過を示めし、心情の開發を現するものは、何れの場合に於ても最も高級の繪畫たるを失はざるべし。今や吾人の特に是事に就て言はむと欲するは、將に來らむとする、我繪畫界の新風潮を望みて、聊か濟々たる作家諸子の爲に其前途を標示せむと欲するの微意也。

新風潮とは何ぞや、一言すれば、歴史畫の復活なり。吾人の觀る所によれば、我邦の文學美術に於て最も荒廢に委棄せらるゝを、歴史の原野となす。悠悠三千年の間吾人の祖先が生々死々、其膏血を瀝し、其遺業を止めたる是國土、是歴史や、常に吾人にとりて最も貴むべき記憶に非ずや。詩人美術家が絶妙の題案、是境地に求め得ずむば、夫れ何處にか求むべき。新たなる國民は當に新たなる眼を以て其歴史を解すべし、況むや先人未だ未鋤を着けざるの地、紛として目に滿てるに於てをや。若し天才の靈犀なる眼を以てせば、一古事記の神史中、以て詩畫とすべきもの十を以て數ふべし。又況んや更に内面の性格に入りて、其幽を闡き、玄を鈎せば、外は歴史の典故に縁りて、内性格開發の大詩美を現せむと、亦強ちに望むべからざるに非ざるをや。我邦の詩人、美術家中、幾人か果して是偉大なる目的を自覺したりしや、徒に其面貌を描き其衣紋を

寫し、漫に題案の高名なるに依りて人に稱せらるゝもの、比々として是のみ。歴史劇は同時に性格の劇詩なり、歴史畫は同時に性格の繪畫なり、徒に皮相の面貌衣紋を以て盡きたりとする、寧ろ陋と謂ふべし。顧みれば、我美術界に歴史畫の流行ありしは、今より數年前の事なりき、而かも其流行や、其當時に於ける歴史文學と一般、さながら流星の如く過ぎ去りにき。爾來青年畫家の舊套の反覆に慊らざるもの、或は其奇警なる着想を社會畫 Genre に現じ、或は其微妙なる感興を比喻畫に托し、或は偉大なる宗教畫によりて其高遠の趣味を樂まむとし、或は瀟洒なる記號畫によりて其幽玄の藻思を味はむと務めたり。其狀猶ほ懷疑の人未だ立命の地を得ず、煩悶自ら遣る能はざるもの、如かりき。されば、其作品必ずしも完からず、寧ろ保守退嬰の一派をして、其瑕疵の多きに勝えざらしめき。されど大に清まむと欲するものは、先づ大に濁

らざるを得ず、誰か渾沌に次ぐもの、清明の剖判ならざるを知らむや。吾人は是希望を以て靜に來者を樂み。迷宮の中に九曲せるもの、何時かは盡路頭上に一新天地を發見するの日あるべきを期待したりき。蓋し是人文過渡の急潮に際して、美術界のみ沈靜ならむことは、内外事情の許さざる所なり、是を以て吾人は、彼の陳敗の圈套に踰躓して、花鳥盆石の工に誇るものよりは寧ろ此の新様の胡蘆を描きて、大方の笑を顧みざるものに、多く屬望したりし也。

是煩悶の時期が其終りを告ぐるは、何れの日なるべき乎、吾人の得て知る所にあらず、誰か又是を明言し得る者乎。美術界の事、氣運と共に天才に待つ。天才の出沒は電火の如し、豫め一定の規律を以て推すべからざる也。唯美術批評家の務むべきは、是天才の出現を容易ならしむべき氣運を助成するにあるのみ。吾人は點より我繪畫界の昨今を觀察すれ

ば最も喜ぶべき現象の、既に天の一方に現れ初めたるを認む、先に謂ふ所の歴史畫の復活、即是なり。

是を先にしては下村觀山の嗣信最後、小堀鞆音の維盛、及び常世、橋本雅邦の蘇武、是を後にしては横山大觀の屈原、鞆音の菅公、藤房、觀山の關維、是等は近時に於ける歴史畫の尤なるもの乎。後の四者は現に今年秋季の展覽會に新に現はれたる者也。是數氏は雅邦氏を外にしては、何れも當代畫家中の錚々たるもの、青春の妙想に富み、進取の意氣に壯にして、重望を將來に寄托するに足れり。前に擧げたる作品は、皆是の數氏が經營慘憺、全幅の精神を傾瀉したる者、實に又展覽會中最も人目を惹くの作なるべし。而して吾人の最も歓迎する所は、(吾人の觀察にして大に謬らさむば)是等の歴史畫が、從來普通の平凡なる人形畫の類に非ずして、動作若くは性格の歴史的開發を顯現するの方向に其歩を進

めたるの一事に在り。今日に於て吾人は彼等に許すに多大の成功を以てする能はざる也、然りと雖も、是歴史的美術の正鵠を捉へ、猛然として直前したるの形跡は、明に其製作の中に顯はれたり。是れ吾人が敢て推奨して、日本繪畫界の一大飛躍と稱せむと欲する所也。

然りと雖も日本畫は、其線畫たる性質上、果して能く性格の幽微を顯現して遺憾なきを得る乎、是れ慥に一疑問なり。是の如きは、性格表示の道に於て最も利便を有する西洋繪畫に於てだに、尙ほ甚だ難しとする所、日本畫中、果して能く是困難に打勝つの要素ある乎、若し果して打勝つ能はずとすれば、如何なる程度まで成功し得べき者なる乎、是等の疑問は、理以て推すべからず、一に日本美術家の熱心なる實驗を待ち、初めて解釋せらるべき也、吾人は必ずしも其成功を豫想せず、唯是の歴史畫の新境地に向て耒鋤を着くるの甚だ必要なるを認む、吾人は是意味

に於て、繪畫界の新風潮に熱心なる歡迎の意を表する者也。

然らば則ち乞ふ、吾人をして二三の事例に就いて歴史畫の題案及契點を述べしめよ。

(二) 屈原

夫れ屈原の人と爲りを見るに、道を正して容れられず、行を直うして斥けらる、身は廟堂の大夫、一朝放たれて江湖に放浪す、能く怨み無きを得ひや、而かも怨て亂せず、悲しみて狂せず、靜に古今を俯仰して、君王の遂に易らざるを惜む、離騷の一篇、其辭何ぞ微にして、其志何ぞ潔き。浩々たる汨羅の水、流れて極まらず、恰も是千古の憂情を語るに似たり。嗚呼、高士屈原の如きもの古來希なり、若し其の怨て亂せず悲て狂せざるの心情を寫すを得ば、是れ豈美術家にとりて絶好の題案に非ずや。

横山大觀是の絶好の題案を取て、長五尺、巾一丈一尺の大畫幀を作る、

着眼己に凡手に非ざるを見る。更に審に檢察すれば、畫面の統一ほゞ宜しきを得、其感興の表出亦渾然として相和し、三閭大夫の面影躍如として人に逼るものあり、吾人は茲に其技工の巧拙を絮説せざるべし、唯作家が屈原の性格を顯現せむが爲に盡せる周到なる用意は、殆ど遺憾なく形色の上に表はれたることを承認するに止めむ。想ふに是一事は、從來畫家の多く想着し及ばざりし所、大觀が是題案は是點に於て吾人の甚だ多とする所なり。

然れども屈原が性格の顯現せられたる方法に就いては吾人大觀と見る所を異にす、恐らくは是れ屈原其人の性格の解釋に就いて彼我の意見相異なるものあるが爲ならむ乎、吾人素より美術を以て歴史の奴隸と爲すものにあらず、美術にはおのづから美術の目的あり、歴史の眞實によりて猥りに其獨立を左右せらるべきに非ず。是を以て、美術の規準を以て間

然し難き歴史的事實ありて、茲に初めて美術の歴史の題案なるもの生ず一切の歴史的事實必ずしも悉く美術の題案たるべきに非るなり。今夫れ一個の歴史的人物としての屈原の性格如何は、必ずしも美術の重きを置く所に非ざるべし、天才ある畫家は、宜しく自家の妙想によりて、一美術的屈原を體現すべきのみ。唯是美術的屈原を創作するに先ちて、歴史的屈原の性格を尋究するは、そが美術的規準との關係を了知する上に於て、最も必要なる順序ならむ。是を以て吾人は歴史畫の製作に於て、一般に左の二法則を提供せむと欲す。

- 一 先づ、歴史的に人物の性格を尋究する事。
- 二 次に、是尋究の結果を美術の規準に照して、一個の美術的性格に醇化する事。

試に吾人をして、是二個の立場より、大觀の屈原を觀察せしめむ乎。

(三) 歴史的屈原

亂山突兀、暗雲の中に、隠現し、風氣慘愴、轉た人を悲ましむ。石磊々として、葛蔓々、幽篁荒れて、芳馨折け、風雨蕭々として、山路永く人を止め難し。人あり、白衣黝面、髪を被て、其上を行く、面少しく下に向ひ、白眼にして、瞢然前路を見る。唇堅く閉ぢて、動かざる決心を示めし、眉高く軒くて、遣り難き憤怨を漏す、右手秋蘭を持して、靜に濶歩し、山風衣を吹て、髮亂披す、步靜かに衣髮亂れたりと雖も、然かも屹然として立つ所あり、其狀滿胸の憂憤、僅に一路の決心を求め得て、驀然として是に赴くが如し。是の如きは、大觀の屈原なり。

是圖によりて見る時は、屈原は、狹量小心、直に泥で其他を知らず、人を怒り、世を怨み、狂亂して、仆れずむば已まざるもの如し。是に對すれば、鬼氣再々して人に逼り、一も悠揚暢舒の感興を與へず。大觀の屈原を見る是の如くにして、果して當れる乎。はた屈原は果してかく迄に

小膽一徹なる憎世家なりし乎、吾人の見る所にして、謬らざるむば、大觀は是性格解釋に於て已に其第一步を誤れり。

げに屈原は、濶達大膽の人とは謂ふべからじ。方正容れられず、讒諂明を蔽うて、身は流竄の人となる、窮愁憂憤、天に訴へ人を怨む、素より人情の自然と謂ふべし。而かも進で忠良の素志を貫く力無く、退ひて一身の安立を保つ能はず、遂に石を懷き、汨水に投ず、何ぞ其局量の小なるや。屈原は決して襟度曠遠の大人物を以て見るべからざる也。而かも吾人熟々之を傳記に徴し、離騷、九章、九歌、以下の諸辭賦に鑑みるに、彼の性情の必ずしも一般小膽なる自殺者に比すべからざる者あるを見る。

彼は、げに、悲みき、憤りき、而かも、猶ほ一分悲憤の外に、超然たるものありて存しき、彼の情は直なりき、彼の行は徑なりき、彼は其情信せられず

其行疑はるゝに及びて、王聽の聰ならず、邪曲の公を害するを怨嗟して、殆ど措く所を知らざりき、而かも彼は尙ほ其直情徑行以外に、天地人生を觀じて、靜に其天命を樂むの理想的世界を有したりき、彼はげに己を全ふするに急なりき、而かも志を外に得ざるに及びて、内、自ら潔うして天道の照鑑に任じたりき、是れ實に彼が安立の地盤なりし也。而かも彼は遂に人なりき、血あり、涙あり、情慾あり、肉體ある人なりき。されば世を脱せむとして遂に脱する能はず、人世を悟り、天を樂まむと欲して尙ほ其人情の羈絆を脱する能はざりき、彼は理に於て安立の地を得たりき、而かも情に於て遂に煩惱のしもべなりき。流竄より死に到る幾多の辭賦は、所詮是心の苦悶を舒べて、其の安立の地を堅ふせむが爲なりき。行々亦行々、山に登り、川を涉り、幾年江湖に放浪して、其心尙ほ安きを得ず、一朝忽然として大悟しぬ、所謂終日春を尋ねて春を見ざ

るもの、歸來庭前の梅梢に十分の春を發見したるもの、彼の末路なりき。想ふに汨水のほとり、彼を見たるものあらば、彼れは必ず莞爾として微笑せしならむ。

乞ふ彼の辭賦をして是心を暢べしめよ。彼れのユーモリストに非ず。又濶達の氣度を缺ける事は、『我は高陽の苗裔、』云々の文字を以て、離騷經を起したるを見ても、已に甚だ明なり。

我は高陽の苗裔、我が皇考を伯庸と曰ふ。攝提孟陬に正し、惟れ庚寅我れ以て生る。皇我れを初度に覽て、初めて我に賜ふに嘉名を以てし、我を名けて正則と曰ひ、我に字して體均と曰ふ。紛として吾れ既に此内美を有てり、又之に重ぬるに脩能を以てす。

其血統と秀才とを夸揚して、己れの衆俗に異なるを言ふ、狷介孤直の人に於て多く見る所なり。進て古今の興廢、治亂の條貫を述べ、以爲らく『黨人の倫樂せる、路幽昧にして險隘なり、豈に余が身の殃を憚らむや、

皇輿の敗績せむことを恐る。其忠篤の心を見る。

王余が中情を察せず、反て讒を信じて齊く怒る、余固より嘗々の患を爲さむことを知る、而かも忍で舍む能はざる也。九天を指して以て正を爲すは、夫れ唯靈脩の故也。

屈原蓋し其直の患を爲さむことを知れるも、而かも天道の正を踏むもの、黙止し能はざりし所也。彼れ故に曰く。離別は余が難る所に非ず、唯天道の數々汚るゝを傷むのみと、是れ天に代て其直を全うせる也。其志何ぞ一に高きや、彼れ其情を述べて、自ら慰めて曰く。

朝には木蘭の墜露を飲み、夕には秋菊の落英を食ふ。苟も余が情だに信にして道に違はずむは、長く零落すとも何をか傷まむ……蹇として我れ夫の前聖に法るは、世俗の服する所に非ず、今の人には合はずと雖も、願くは彭咸の遺則に依らむ、長へに太息して以て涕を掩ひ、人生の多艱なるを哀む。

彼は實に死に致るまで太息して人生の多艱なるを哀みき。然れども彼が是悲哀の後には、必ずしも安心の地盤無かりしに非る也。若し夫れ『余

が心の喜ぶ所ならば、九死と雖も其れ猶ほ未だ悔ひず』と言ひ『時俗の工巧なる、規矩に違ひて而して改錯し、繩墨に背きて以て曲に従ふ、鬱悒として余れ佗僚す、吾れ獨り此時に窮困す、寧ろ逸に死して流亡すとも、余れ此態を爲すに忍ひむや』と嘆じ、『清白に伏して以て直に死するは、固より前聖の厚うする所なり』と述ぶ。屈原が是際の胸裏、光風霽月の觀なしとも、尙ほ悠々逼らず、靜に人生を觀するの餘裕ありしや疑を容れず。若し夫れ末段、天下の壯遊を想ふところ、憂愁の雲霧を排斥して青天白日を仰視するの觀あり。

吉日を擇で吾れ將に行かんすとす、瓊枝を折て羞となし、瓊塵を精して糞となし……吾れ將た遠く逝て以て自ら疏せむとす、適りて吾れ夫の崑崙より道す、路脩遠にして以て周流す、志を雲霓の詭譎たるに揚げて、玉鸞の啾々たるを鳴らす、朝に帆を天津に發し、夕に余れ西極に至る、鳳皇翼して其れ旂に承り高く翱翔して翼々たり、忽ち吾れ此流沙に行き、赤水に遊て而して容

興す

彼れ其優遊自得を想像し、顧みて其故國を懷ふや、則ち曰く、

忽ち夫の舊郷を臨み眺る、僕夫悲て、余が馬懷かしみ、蜷局して顧みて而して行かず、已むぬる哉。國に人無し、我を知るなし、又何が故都を懷はむや、既に興に美政を爲すに足らず、吾れ將に彭咸の所居に従はむとす。

離騷經は一節を以て終りぬ、彼れ既に是境地に悟入せり、哀しや理によりて情を強む能はずとするも、尙ほ釋然として身命の外に悠揚たるの心事を見る也、如何が一徹短慮、憂憤の中に狂死したるものと同じにして見るべけむや。屈原が是情操の明に顯はれたるは、獨り離騷のみにあらず、其他の辭賦に於て皆然り。或は『苟も余が心其れ端直ならば、僻遠なりと雖も何ぞ傷まむ』(九章一首)と云ひ、或は『忠賢必ずしも用ひられず、前世と與にして皆然り、吾又何ぞ今の人を怨みむや』(同)と云ひ或は『人生命あり、各々錯る所あり、心を定めて、志を廣うす、余何

ぞ畏れむ』(懷賦)と云ふ、何れも是心に非ずや。『卜居』は一身の進退に迷ひて苦悶するの情を伸ぶるもの、其大卜鄭詹尹をして、『君が心を用ひて君の意を行へ、龜策誠に此事を知る能はず』と言はしめしは、即ち自ら其心の行く所を恣にするの意にあらずや。『漁父』の一篇に到ては、更に從容自得の趣あり。彼此相参照して、竊に彼が人と爲りを思へば。悲哀して逼らず、怨誹して激せず、窮達の外に超然として、容與として人生を達觀するの半面ありしを見る。哀し司馬遷が彼を評して、

渾汗泥の中に疏濯し、濁穢を蜷蛻し、以て塵埃の外に浮游し、世の滋垢を獲ず、瞬然泥して滓せざるもの也。此志を推すに日月と光を争ふと雖も可也 (史記屈原傳)

と言ひしは、寧ろ彼を過賞せりとするも、宋玉が彼を目して、憤死せりとするが如きは甚だ誤れり、

怨を蓄へ、思を積で、心煩懣として食事を忘る、……結翰に倚て太息し、涕潸潸として賦を露

ふす。慷慨し絶て得ず、心管中亂して迷惑す（九辯五首）

是れ屈原をして一匹夫となすものに非ずや。宋玉は屈原の弟子、其師放たれて救はず、又従はず、徒に讒人に従て尸位を擁するもの、如何ぞ其師の高潔たる情操を解し得べき。而かも彼れが、大悟徹底、冷灰枯木の如き人物にあらず、常に不斷の煩惱に執着して、離るゝ能はざりしは、彼が流竄の後幾多の辭賦を作り諄々として同一の感情を反覆せしにても知らるべし。『日昧々として其れ暮れなむとす、憂を含み、悲を虞しみ、之を限るに大故を以てす』（懷沙）大故は死也。彼は死するまで是苦悶を擺脫し得ざりき、而かも屈原が詩歌及繪畫の絶好題案たる所以のもの、實に是一分の執着を存じたる所にある也。

是の如きは、吾人が見る所の歴史的屈原の性格なり。今や横山大觀の繪畫に顯れたる屈原の性格は、大に是と異なるものある、既に述べたる

が如し。大觀の志、若し歴史的屈原を描ぐにありたらば、吾人其見解の誤謬を斷言せむ。而かも大觀は美術家なり、或は其美術的標準に隨て、歴史的性格を醇化したるの結果なるやも知るべからず、大觀の志若し後者にあらば、吾人は更に他の理由によりて、氏の着想を非認せざるを得ず。蓋し這般の問題は、歴史畫の全體に亘りて、重要な關係を有するを以て、左に一言の辯を費やす、必ずしも贅疣に非らむか。

(四) 契點の撰擇

技工の鍛鍊は、修養によりて凡手も是を能くすへし、畫題の撰擇に到りては、殆ど天才の事也。畫題は天才の試石なりとは、必ずしもダイエ

ルが奇矯の言のみに非ざるべし。畫題撰擇の困難なるは、或適當なる事件若くは人物を歴史中より搜索するの困難なるに非ず、唯是の如き事件人物に就いて、適當なる契點を

捕捉するの困難なる也。詩人が篇章を重ねて。徐ろに説述する所の感情事件が、一面の畫幀によりて直下に顯現せられ得るの理由は、一に是の契點の適當なる案配に歸せざるべからず、是の如き契點は、常に當面の事體を明にするのみならず、是事體を生起したる過去の經行及び是事體より生起せらるべき未來の結果に就いて、語る所無かるべからず、觀者は初めより其歴史的事實に通曉せむを要すべし、而も是の如き觀者をして優に是事實の全體を想起せしむるの要素を具ふるに非ざれば、未だ其契點の完美を稱するに足らざる也。

吾人は是の如き契點を何處に求べき乎、是れ畫家にとりて最も重要な問題にして、其答案は即ち直に天才の有無を證す。是事に關するレツシングの説は頗る吾人の意を得たり、其大意に曰く、『繪畫の契點は、吾人の想像力の自由なる活動を容るゝものならざるべからず、故に感情の

終極の階段を示めすべからず、何となれば感情の開發、其極限に達すれば、想像の作用すべき餘地無ければなり。ラオコーンの像が、嘆息すればこそ彼の叫喚をも想像し得らるゝなれ、彼れ若し叫喚せむには、吾人は其無趣味の體勢を目撃するの外、前後又想像の餘地無かるべし、是場合に於ては、吾人の聞き得べきものは唯彼の呻吟のみ、見得べきものは唯彼の末期のみ（ラオコーン第三章）レツシングは、希臘の畫家テモマックスが畫ける『メデアと其子』の例を取りて、最も適當なる例證を加へたり。以爲らく、テモマックスはメデアが其子を殺害する慘景を描かずして、是殺害に先つ一點瞬、即ち慈母の愛情が、尙ほ噴沸の烈火と争闘しつゝありし時を寫せり、是れ最も適當なる契點を捉へたるものなり、何となればメデアの事蹟を知れる觀者に對して、是畫面は明に其苦悶の結果如何を想像するの餘裕を與ふればなりと。

吾人は是點に關して、レツシングの説に十分の同意を表する者なり。蓋し氏の所謂想像の餘地を止めよとは、即ち他面より考ふれば、觀者をして最大の同情を起さしむる契點を取れとの意に外ならず。吾人の最も同情を表するは、人の死に非ず、又死の準備に非ずして、寧ろ是最後の悲劇を構成したる事情にあり、是れ吾人の多くは、是世にありて多少の如き境遇に際會し居るべきを以て、這般の煩悶に同情を表すること、亦適切なるを得なければなり。されば、例へば『ハムレット』劇の最も吾人を感動する所は、是不幸なる公子の復讐にあらず、又復讐を決心したる以後の準備に非ずして却て是破裂に先てる懊惱苦悶の状態にあり。レツシングが擧げたるメデアの例にありても亦然り、吾人が見て最も痛切なる同感を起すは、是女丈夫の胸中に於ける感情の鬭争及び苦悶にありメデアの事蹟を知れる吾人は、是苦悶の結果として起るべき慘劇を想像

する事によりて、更に一層の感を深ふすべし。

契點の選擇は甚だ精微ならむを要す、同一メデアの畫題にありても、其契點の異なるもの現に三種あり、何れも今は失せたるテオマックスの遺型に據りて成れりと思惟せらる。其のポムペーにあるものは、メデアは尙ほ煩悶の狀にありと雖も、右手劍を案して將に抜かむとするの勢を示めず、是れ一なり。其のヘルキュラニウムにあるものは、其姿勢はポムペーにあるものと均しく直立し、忍び難き煩惱の顔色を示めせりと雖も、劍を抜かむとはせず、唯其把柄を下方にし、双手を交へて是を持するの狀を示めず(ルユグケ美術史一九七頁を見よ)是れ二也、此場合に於ては、煩悶の情狀前よりも一層明晰也、何となれば、劍を案じて是を抜かむとする者は、既に決心の門戸に達したる者なれば也。其の第三の例はアルレスにあり是畫にありては、メデア已に全く拔劍して、將に其子を刺さむとするの

狀を示めず、蓋し三個の中最も劣等なるものなり
(メデアの例はルユブケ、ミユ
カレル及びダイエルの三氏に
據る)

英國の畫家にして、且美術批評家なるジョナサン、リチャードソンも亦是契點の撰擇に關して、最も興味ある一例を指摘せり。氏は聖書に於ける姦通の告訴を受けたる婦人の畫題に就いて論じて曰く、

是畫題には種々の契點あるべし、判官とパリサイ人との婦人に對する難詰の狀を描くも一法あるべし。又耶蘇が地上に文字を書するの狀を描くも亦然り。又はパリサイ人の初めて石を投ずるの狀を寫すも、或は婦人の放免を寫すも、何れも一法ならむ。然れども是畫題に於て、適當の契點を捉へむと欲するものは、第一法を拒否せざるべからず、何となれば副人物たる判官とパリサイ人とを主人とするもの恐れあればなり。第二法は耶蘇の態度を平凡ならしむるのみならず、毫も事件の進行を表示せず。第四法も亦不可なり、何となれば、婦人の放免は最も威嚴あり、且重要な事件には相違無きも、一切の事情已に沈定し了りたる時なれば也。故に實際畫題として取るべきものは、第三法のみ。是場合にありては、耶蘇は十分の品位を保ち、原告は赤

面して度を失ひ、翻て希望と歡喜は將に被告の面上に湧出せむとす、是れ最大の感興と活動と、意味とを有する好契點と謂ふべし(繪畫批評論二七頁)

是等の説明によりて、契點撰擇の方針、畧々明かなるを得べきか。是を要するに、畫題として最も適當なる契點は、最後の大團圓、若しくは大破裂に先つ所の事情を明示するにあり、是の如き事情は、一面過去に接して其由來を表し、一面將來に觸れて其結果を指す、是活動的要素あり、初めて觀者をして痛切なる同情を起さしむ、古來歴史的繪畫の偉大なる作品は、多く是條件を具足せり、吾人が先に流竄の屈原を以て、絶好の畫題となせるの意亦是に存す。

吾人の解釋にして大に謬らさむば屈原の如きは實に身を以て絶好なる歴史畫の題案を供したる者也。彼れが流竄中の情操は、正にメデアが悲劇前の煩悶なり、進では事違ひ、退ては心安せず、理は天地を達觀して

情は尙ほ人生を離れず、山河に優遊して胸に隱憂を絶たず、其歌には覺悟の趣あれども、尙ほ悲愁の響あり、若し大天才あり、彼が是幽妙の情思を捉へて、布帛の上に顯さば、是れ豈一篇無聲の抒情詩に非ずや。流竄の屈原や、實に天成の畫題也、絶好の契點也。

吾人は是に到りて、愈々大觀が是天成の畫題を捉へて、而も是絶好の契點を逸したるを惜むなり。

大觀が描きたる屈原は煩悶の屈原に非ずして、決意の屈原なり。沈憂の屈原に非ずして、憤激の屈原なり、彼は江湖に優遊して安立の地を靜觀する、懷疑詩人に非ずして、一個の目的、一個の情操を抱て、將に其業に就かんとする慷慨男子也。吾人は彼に對して多く、同感を表する能はず、同感すべき煩悶は、已に彼の胸を去りて、其面は已に決意の色に輝ければなり。又多く想像の餘地を止めず、想像すべき結果は、已に端緒を表

はしたればなり。大觀は何が故に、特に歴史的屈原が提供せる天成の好畫題を捨て、何が故に、特に是に利益なる性格と契點とを擇びしや、吾人の解し得ざる所也。

而して殊に注意すべきは、大觀は是畫面に於て二重契點の過失を犯したる事、是也。二重契點とは、強ひて事件の經過、若しくは性格の開發を示さむが爲に、元來分離せらるべき二個の契點を結合するの過失を謂ふ。大觀は、屈原をして秋蘭を手にせしめたり、是れ蓋し、屈原の詩賦に據れるものならむ。然れども、夫の『秋蘭を紉て佩となす』と謂ひ、『朝に此の木蘭を擽る』と云ひ、或は『蘭旌』と云ひ、『蘭棹』と云ふもの、身の芳純に比して世の混濁を悲めるなり。若し吾人の思惟する如き屈原を描き、彼をして是一蕙の蘭を持せしめば、逍遙容與の間、尙ほ身世の乖離を傷むの情、温然として却て痛切なるべからむ。而かも大觀の屈原は、

慷慨髪を被て濶歩する丈夫なり、彼れが如きもの、蘭を採て何爲るもの
 乎。作者の意、若し是に依りて其過去の憂愁を示すにあらば、是れ所謂
 二重契點なり。もし是に依りて單に屈原が性情の高潔を示めずにあらば、
 是れ殆ど無意義なる記號畫なり。抑も大觀の素志、逍遙容與の屈原を描
 くに存したりしに非る乎。

是を要するに大觀の屈原は、歴史的性を顯はすものとしては、其實
 を誤り、美術的醇化を経たるものとしては、其法を失ふ。所詮は完璧の
 製作に非るなり。唯性格描寫の方面に一步を進め、日本畫の將來に一生
 面を開拓せむとするの着眼と勇氣とは、眞に青年畫家の爲に、萬丈の氣
 焰を吐きたる者と云ふべし。

想ふに大觀の屈原は、日本畫界の新風潮を代表する一例に過ぎざらむ
 のみ。其他、小堀鞆音の管公、藤房、寺崎廣業の陶淵明等、皆是同一の傾

向に驅られたるものなるべし。吾人茲に一々其批評を試むる能はず、唯
 下村觀山の闡維に就いて一言するの要あるを見る。

(五) 信仰畫と歴史畫

ジエムソン夫人は、宗教畫を分て信仰畫 devotional と歴史畫 historical の
 二種となせり。所謂宗教畫は、其内容を示し、所謂歴史畫と信仰畫とは
 其製作の目的に就いて言へるもの、蓋し妥當の分類と稱すべし (宗教美
 術と傳説美術、卷一、十二頁)

闡維はジエムソン夫人の所謂信仰畫なるか、將た歴史畫なるか作者た
 る觀山の意、何れにありとするも、吾人は失敗の畫題なりと斷言するを
 憚らず。

是畫幀は、歴史的事實に本ける點より見れば、一個の歴史畫なりと雖ど
 も、而かも其製作の方法に就いて仔細に點檢すれば、作者の意蓋し一個の

信仰畫を造るにありしならむ。其人物は凡て從來佛畫に見る所の人物也、佛陀の聖軀は金色を以て塗抹せられ、其上に顯はれたる半圓狀の光翳、亦燦爛たる金色なり。全幅の素地を初めとして、顔面衣紋に到るまで、務めて華美莊麗なる着色を用ひ、光彩陸離として人目を射る、是れ嘗て文藝復興前期の以太利畫家が、ピザンツ派の影響を受けて、羅馬教會の爲に描きける者と同じの筆法、明に作者の素志信仰畫にあるを見る。

夫れ三世の救主、一代の宣教を終へ、跋提河上茶毘一片の烟となる、生者必滅會者常離の理を示して、殊に痛切なるものあり、信仰畫として必ずしも好題案ならざるにあらざらむ、然れども、今日に於て新に信仰畫を製作するの一事は、吾人の甚だ取らざる所なり。是れ特に觀山の闇維に就て言ふにあらず、一般繪畫界の將來に就いて、我青年畫家の注意を喚起せんと欲する也。夫れ信仰畫は宗教的社會と相待つ者也。宗教的

熱誠なき社會に對して、信仰畫を作る、是れ猶ほ水に油を混ぜんと欲するが如き也。良し作者の敬虔なる信仰によりて、幸に巧妙なる製作を遂げたりとするも、社會は其彩色形體以外に、幽深なる宗教的意義を看取りし能はざるを如何すべき。今や宗教の時代は既に我邦に過ぎ去れり、良し將來新宗教の勃興を見得べしとするも、それは在來の宗教と全く其面目を異にするものなるべし。今日宗教の名によりて存在するものは、生命なく發達なき死せる形骸のみ。僧侶は活計の爲に其經を讀誦し、人は埋葬を托するの故を以て其寺に出入す、毫も他の故あるに非る也。人は昔話としての外は宗教に就いて何等の興味を感ぜざる也、是の如き非宗教的否寧ろ反宗教的社會にありて、筆を信仰畫に染めむは、甚しく時代の精神を無視せる所業に非ずや。げに宗教的美術は過去の史上に於て驚くべく偉大なりき、されどその其時と、人と、共に宗教的生活を營みしが爲

のみ、今の無信仰なる日本に於て、天平美術の流風を懐ひ、文藝復興期の餘韻を慕ふも、世事全く稜を渝えたるを如何すべき、吾人は我青年畫家が是廣濶なる天地の間に充實せる、無数の好題案を外にし、徒に古に泥みて今を測らず、漫然信仰的美術の死灰を再燃せしめんとするを見て、轉た歎惜せずむばあらざる也。

觀山の闇維は、所詮是邪道に陥りたる者也。加ふるに燦爛たる金碧を以て、徒に感興の神聖を支撐せむと務めたるの跡あるが如きは、陋劣と謂はざるべからず。吾人が目して失敗の作となす、果して當らざる乎。

次に一個の歴史畫として是を見む乎闇維は全く其契點を誤りたる者也。大聖釋迦の一代は一個人として絶大なる歴史なり。觀山は、何の觀る所あつて特に是闇維を撰びたる乎。吾人は是萬人一様の運命を目撃して、特に深痛なる同情を起さざる也、釋迦の威大なる精神力は、既に其活動

を終り、今や一片の烟となりて、衆人の哀悼を止むるのみ。されば、是畫の主人公は、周囲の群集なり、釋迦其人に對する敬虔の感情、威靈の想像、如何にして起るを得む。是れ信仰畫として多少の興味あらむも、歴史のとしては殆ど無意義に近しと謂ふべし。

是の如く觀來れば、觀山の闇維は、經營苦心の作なるにも拘らず、信仰畫としても、又歴史的としても、共に失敗の作なりと謂はざるべからず。畫題及び契點にして一度其撰擇を誤らば、其技工の修鍊も、又如何ともする無けむ、是れ我青年畫家にとりて最も有益なる訓誡に非ずや。

茲に一言の注意を要するあり、吾人は信仰畫を排するも、決して宗教畫を斥くるの意無し、唯是を信仰的に描かずして、歴史的に顯はすべしと謂ふのみ。若し宗教を一個の歴史的現象として見む乎、其の興味に富める、啻に政治文學等の事蹟に譲らざるのみならず、人心の偉大なる感

畫を解し、ラフハエルが『神聖なる家族』を作りたるの例に倣はざる、是れ日本畫に於ける新大陸也。(明治三十一年十一月稿)

以上述べたる所は、要するに歴史畫の題案、及び契點の性質を明にするにあり。近來繪畫界の新風潮が、歴史畫の復活に存せむことは吾人の希望する所也。是を以て、特に事例を最近の製作に取り、聊か青年畫家の針路に就いて鄙見を述べたるのみ。葛葉の言、我繪畫界の一顧に値せば幸也。(明治三十一年十一月稿)

無趣味の社會

『吾れに樂むべき自然の美なからむには、寧ろ海を踏みてトリトンの歌を聞かむ』と歎ちたるなにかしの詩人の今更に忍ばるゝかな、あはれ

如何なれば、世の様のかくは無趣味に成り果てにけむ。

今や、凡ての美はしきものは世に貴き寶となりぬ。そは獨り罪惡を以て購ひ得べければなり。道德はこの趣味無き社會の障壁となりて、凡ての美はしきものは其外に斥けられぬ。所謂義しきもの、清きものは、彼れと共に歩まず、彼れと共に交らず、彼れの孤影を踵ひて其手を握らむとするものは、詐り也、盜み也、汚れ、侮り、禍也。

今や、一切の趣味は、世の義しき者の累わづらひとなりぬ。人は其嗜好をだに道德の規矩によりて律し去らむとす、假面は盛裝に缺くべからざる者となれり、否不義の名を甘するに非ざれば、彼れは其假面をだに脱ぎ難き也。

今や、社會は一路となり、人生は一面となりぬ。人は如何なる場合に於ても、唯一つの顔、唯一つの聲を有せざるべからず、否らざれば偽人

として詆られむの憂あればなり。

今や、世に大人あるのみ、小兒あるのみ、されど人なき也。男子と女子とあるのみ、されど人無き也。紳士と平民と、富者と貧者とあるのみ、されど人なるもの無き也。

今や、人々自ら其獨りを喜びぬ、友は彼に於て要無きなり。彼は利害に非ざれば動かす、世は是を直しと呼べり。彼は自らの幸福をだも他人の口より聞かすむば厭かざるなり。

斯くて、趣味無き人は趣味無き家庭を作り、趣味無き社會を造り、趣味無き國家を造り、この大いなる人生をして、徹上徹下、趣味無きものとなし了せむとする也。

今や、若き女と男とは、白晝に物言ふことをだに許されざるなり。されど人は一枝の花にも尙ほ好惡の情あるに非ずや。

かの其情を抑へ、其色を動かさざる人は、大いなりとして尙ばる。されど性を矯むるものは、均しく是れ偽りには非るか。あはれ離愁に泣かず、公義に憤らず、冷灰枯木の如きもの、何が故に獨り大いなるか。

かの弊緼袍を着けたるもの、何故に高くして、純綺袴を穿てるもの何故に卑しき乎。尙ふべきは唯その嗜好の高からむことには非ざる乎。

吾れ事を爲すに當りて、人は先づ其の利する所如何と問ふ。あゝ利する所乎、利する所乎、天下の事、利を離れて爲すべからざる乎。いかなれば人は争はずして交はる能はざる乎、鬪はずして生きる能はざる乎、抑々道義倫常以外に、人生の餘地を留めざる乎。

一面の人は唯一面の人を見る。劍を把て琴を弾き、三軍を塵して野花に泣く。彼れ、其行に於て矛盾する所ある乎。金錢は、今の世に於て凡ての物の標準となれり。大臣も、牧師も、藝

として誣られむの憂あればなり。

今や、世に大人あるのみ、小兒あるのみ、されど人なき也。男子と女子とあるのみ、されど人無き也。紳士と平民と、富者と貧者とあるのみ、されど人なるもの無き也。

今や、人々自ら其獨りを喜びぬ、友は彼に於て要無きなり。彼は利害に非ざれば動かす、世は是を直しと呼べり。彼は自らの幸福をだも他人の口より聞かすむば厭かざるなり。

斯くて、趣味無き人は趣味無き家庭を作り、趣味無き社會を造り、趣味無き國家を造り、この大いなる人生をして、徹上徹下、趣味無きものとなし了せむとする也。

今や、若き女と男とは、白晝に物言ふことをだに許されざるなり。されど人は一枝の花にも尙ほ好惡の情あるに非ずや。

かの其情を抑へ、其色を動かさざる人は、大いなりとして尙ばる。されど性を矯むるものは、均しく是れ偽りには非るか。あはれ離愁に泣かず、公義に憤らず、冷灰枯木の如きもの、何が故に獨り大いなるか。

かの弊緼袍を着けたるもの、何故に高くして、紈綺袴を穿てるもの何故に卑しき乎。尙ふべきは唯その嗜好の高からむことには非ざる乎。

吾れ事を爲すに當りて、人は先づ其の利する所如何と問ふ。あゝ利する所乎、利する所乎、天下の事、利を離れて爲すべからざる乎。いかなれば人は争はずして交はる能はざる乎、鬪はずして生きる能はざる乎、抑々道義倫常以外に、人生の餘地を留めざる乎。

一面の人は唯一面の人を見る。劍を把て琴を弾き、三軍を鏖して野花に泣く。彼れ、其行に於て矛盾する所ある乎。

金錢は、今の世に於て凡ての物の標準となれり。大臣も、牧師も、藝

妓も、其報酬は金錢也。金錢は官吏を奴隸にし、貴族と富豪とを木偶にし、慧しきものを狼とし、愚なるものを驢馬となせり。快樂は金錢によりて計られ、名譽も、徳義も、金錢によりて賣買せられむとす。賭博は彼等が唯一の遊戯なり。

美術は宴樂のうつわとなれり。富豪の爲に白銀の像を造るものあれども詩人の爲に一基の墓を修むるもの無し。人は祭りをだに營まずなりぬ。神は其費えに報ひざればなり。

嗚呼トリトンの笛の音やみてより、既に三千年。この趣味無き社會を如何にせむや。あゝこの趣味無き社會を如何にせむや。

無趣味の家庭

何故に今の世に料理屋、待合、藝妓、遊女、『めかけ』の供給多きかを問

はむものは、先づ何故に今の家庭が是の如きものを需要する人を出し得るかを問はざるべからず。

現時日本の家庭は、既に舊組織を失ひて未だ新秩序を喚び來らず、感興無く、趣味無く、快樂なく、品位なく、名譽無し、蓋しあらゆる不徳の最も生れ易き家庭なり。而して其最大缺點は昔時の制裁を失ひながらも、尙ほ其形式主義を保てる事也。

今中等以上のや、品位ありと稱せらるゝ家庭を見よ、多くは是れ最も陰鬱に、最も乾燥無味なる家庭に非ずや、屋外に妾を蓄へ、花牌を弄する主人の其子弟に對するや、猶ほ儒學先生の其門下に對するが如きなり。人は其家にあつて戯れ、笑ふことを容れず、宛然として何れも堂上の君子也、彼は其家門を出で、初めて其衣を寛うするを得、實に『我家の窮屈に苦む』とは多くの人の歎聲なり。是に於て拘束無き社會の他

面に趨りて、其人性自然の要求を満さむとし、知らず、識らず、罪惡の窟に入る。是れ勢也。

家庭は父母、兄弟、妻子の共に棲住する所なり天下の親善なるもの、父母、兄弟、妻子を措て何處にか求むべき。今の人家庭を見ること露舎の如し。其罪の存するところ、言はずして明也。

今の世に於て社會風紀の壞亂を救はむと欲するのは先づ是の如き家庭をして感興あり、趣味あり、快樂あり、品位あり、名譽あるものと爲さるべからず。今の家庭や、其のや、品位あるものは、形式に偏して人性自然の發動を妨げ、其や、趣味あるものは、放埒に失して道義の範を超ゆ。共に不可なり。獨々怪む、所謂社會改良論者の是を言ふもの少きや。料理屋、待合、寄席、演劇の取締の如きは抑も末而已。

大人物と私徳

人は其事業に於てのみならず、亦其品性に於ても大なり得べし。是二者を兼ね備ふるものを大いなる人物と云ふ。

グラッドストーン氏は、ハワードン寺院の門丁の病を訪ひ、爲に聖書を讀みたりき。彼は是心を以て天下の事に當りたり。其七十年間の政治的生活に於て、一人の私敵を有せざる眞に故ある也。

世には所謂功利の外にも道ある也、所謂階級の外にも人ある也。官邸の玄關に私生兒を置去りにせられたる國務大臣を怪まざる國民は、未だ大いなる人物を解せざる也。(三十一年九月稿)



時代管見終

附 録

わがそでの記

Wenn man an die Heimat geht,

Bei ihr um die Freuden;

Und ist keine Seele zu Toben bestellt,

So greife Selber!

世をうきものとはたが言ひそめし。想へば袖ふたつに
は包みかねしわがこころ。うたてや年をへし長きねざめ
の友となりぬ。はつ夏の月いと哀れなる夜半、われとも
なしに起きいで、簾のつま引き上ぐれば、落つるは露

か、雨か。秋ならぬ風に桐ひとは散りぬ。

里にては今はねなましものを、うとましの身の程や、
心も遠き田でえの里に、夕なみ千鳥あはれに泣きわたり、
物さびしき空にたぐひて、峯の松風こゑると共に、行衛
もしらずこぶかくも吹き合はずかな。

さらば、残むのともし火かい上げて、人には見えぬわ
がそでの幾とせをしるさなむや。心むづかしうもつれた
れば、太息のみぞいやまさりたる。

* * * * *

おとしの暮われ日光に遊びて病を獲てしかば、月の

あひだは床に就き、歳のなかばを旅にすこしぬ。かくて
病はいえぬ。

まことに病は親しむべき友にてはあらざりき。沈みもだ
へたるこゝろに人生は其憂鬱なる一面をもて迫るなり。
樂しき、光ある世界はわれを去りて、悲しき、暗き天地
はたより無き身をつゝむなり。涙をかくせし皮一重の、
力無くうすれゆけば、泣くねをまぎらす笑だに心にまか
せず。色あさましう衰へて、肉落ち、骨たてるかほばせ
に、幽かにあやしきひかりをうかぶるさま、はたこれ美
はしとは言ひ難し。なべての人のうとみきらへる中に限

りなきふたつの世を敵として戦へる、病める人のこゝろは、洵に哀れむべきものぞかし

われ病にかゝりて、こゝにまとの人生を見そめき。あだ波たてる世の常にかけはなれて、こゝに静かなる寂しきまことの世相を觀じそめき。利に走り名にあこがるゝともがらの外に、眞の友情の貴とむべきことを覺えそめき。あだに過せし幾とせの、偽多くつみ深きを想ひて、こゝに青春の移るひやすく、勝事のとこしえならざるを嘆きそめにき。

かくてわれ、家にはなれ、友にはなれ、わが戀しき人々

にはなれ、是黙思を友に、身獨りにして東海のほとりにさすらひぬ。冬のはじめなりければ、風いたく身にしみき。

相摸なる國府津の里にやどりし一夜。われあやしき思ひにうたれて、小夜更くるまで泣きくらしき、波の音も松風も、わが耳なれしには、寂しながらにあやしきも聞えざりしに、いとはた寒き枕のもとに、涙のみは熱かりし。是夕都なる人にとて薄墨の色にあはれを籠めし、幾尋の文は、封しもあへずやりすてられしが、われは今にいたるまで自ら其何の故なるを知らざるなり。

夜深くして夢に其人を見き。月の光は氷の如く冴えわたりて。そよどの風の音もなく死せる如き天地の間に、わが其の人はわれをながめてたいすみき。されど其おもては鉛の如く青白く、手にもてる薔薇の花は見るかげもなう枯れ凋みにき。

熱海のおた月は、まことに樂しき、あはれ深き冬の暮らしなりし。

よそならば吹雪にとぢられて、日かげもうすき冬の眞なかも、名にし負ふ暖地なれば、こちふく風もさむからず。

むつきはじめの梅が香は、はやくも春をつげそめて、野邊のやけあとの緑なすは、人のこゝろもときめくころか。とまやせもに岩海苔のかほりせるもをかしく、蘆のやに心ぼそく立のぼる煙ものさかなりや。

海原とほく見わたせば、相摸、安房の山々、雲かかすみのすがたおもしろく、大島がねにたつけふりの、春風にたなびけるに、水や空とも分ちかねたり。沖の小島と誰がよみたりし、はつ島わたり漕くふなうたの、寄る浪でとに聞こゆるも床しく、魚見が崎のこなたより、渚をつたふて、砂白ろく、松青きほとり、濱千鳥のむれとぶさ

まもをかしうや。うしろには日金、十國の山々を負ひて、前には天空海濶の間に、一灣の春を擁する豆南の風光は、筆にはなかくに及びがたし。

國府津の里にやどりし次の日、われ痾をやしなふべく是地に客となりぬ。

われに業ありき、今や之を捨てぬ。われに友ありき、今やこれに離れぬ。されど行李の裡に一卷の『はいね』集を収めたり。わが業は尙ほこゝにあり、吾友はなほこゝにあり、されど『はいね』は吾爲には不幸なる友なりき。

如何なる星の下に生れけむ、われや世にも心よわき者

なるかな。暗にこがるゝわが胸は、風にも雨にも心して、果敢なき思をこらすなり。花や探るべく、月や望むべし。わが思には形なきを奈何にすべき。戀か、あらず。望か、

あらず。あはれ『はいね』はわが爲にそを語りき。

われやまさなき人に物の哀れを知りそめき、思へば葉末の露のいとはかなき終りなりし。月影のまどかなる望もかつては其中に寫りしが、風そよぐ且の野邊に跡も無く、も、夜のひじのはしがきに、君やいのちとかちしも、思へばあだなる夢なりき。かくて、吾がこゝろはどこしえに癒えぬべく傷つけられき。わがこの思ひを誰に

か語るべき。月の夕、雨のあした、われ『はいね』を抱きて
共に泣きしこと幾たびか。

かのうるはしき風景に遇ふごとに、われは還らぬ昔を
忍ぶなり。山のかたち、水のすがたは、吾心にさゝやきて、
吾れは言ひがたき哀れを覺ゆるなり。人知れずしぼる袂
に、われはいくその思をつゝみしか。あゝ魚見が崎よ、
錦の浦よ、われ爾のために幾痕の涙をしるせしか。

月あかき一夜、われひとり浪打ぎわに佇みき。濱千鳥聲
絶えて、浦風すめるそなれ松、浪の音のみいとさえたり。
夢の如き水けふりは、山の端白ろくとちてめて、空には

星の影まれなり。われ岸邊の松にうちもたれて、ふるさ
と遠く思ひかへしぬ。

想へばはるけくも來つる者かな。わが父母にわかれわ
が兄弟にそむきて、われやひとり何の爲に是地には漂泊
よへる。わが命をわけし弟は、われに先ちて死にたり。
われを愛せし姉上もまたかへらぬべくゆき給へり、わが
誓ひてし人はた永くわれにそむきぬ。われや何の爲に獨
り此世にはどまされる。山青く水白く、幾千よるづの是
大塊に、人や生るゝ何の因、何の縁ぞ。花飛び葉落ち風
吹き鳥鳴く。合ふや柳因、別るゝや絮果、何れ終りはお

な、じ、流、轉、の、世、に、人、や、何、を、望、み、の、五、十、年、の、い、の、ち、が、も。
 月、冴、へ、波、し、づ、か、に、し、て、ま、と、に、し、め、や、か、な、る、夕、な、り、き。
 お、ろ、か、な、る、わ、れ、は、爲、す、こ、と、も、な、う、小、夜、更、く、る、ま、で、た、ち
 つ、く、し、き。

またのゆふべ、われ『はいね』を携へて磯邊の丘のただか
 きにのほりぬ。夕日は山のあなたにかたぶきて、半天の雲
 は残むの光に色づきたり。大島山の夕けふりは、薄むら
 さきにたなびきて、山光水色入日とともに黒みゆくにつ
 れ、目もはるかなる帆かげの空に入るを、わが心ゆくえ
 も知らずなりぬべう、恍然としてうちまもりぬ。わが手

は思はず『はいね』にふれて、わがめでよめる『望みなき人』は
 開かれぬ。

想へば、望や、戀や、残りなうやれはてい、吾れはわ
 たつみの情なく打ちよせたらむ屍のこゝと、是荒れすさひ
 たる、冷やかなる、磯邊に横はるなり。吾前には海原あ
 り、吾うしろには苦しみと悲しみとあり、かのなやまし
 げに覺束なくも空行く雲は吾一生にも似たるかな。浪の
 よる見、鳥のなく聞けば、流石にすぎにし年の忍ばれて、
 忘れし夢の今更にくりかへさるゝなり。静なれ浪よ、鳥
 よ、わか此世のいのちは早やく巳に往にしを知らざるか。

われは卷をどち面を掩ひぬ。

見わたせば、日は名残なく、れはて、里には燈火か
 いやけり。山も島も限りなく小さく、遠きこちにして、
 脚下にひく浪の碎くる音も、程はるかにきこえ、身は
 やうやく是世にはなれて、奈落の底にも沈まひず覺えた
 り。われは心細そさに得たえで、急ぎ歸り、きぬひき被
 きて臥しき。

熱海にゆきてより越て數日、吾れ『はいね』の外に故人を
 得たり。都なる吾友嘲風來りたづねぬ。

嘲風は京都の人、吾れと共に大學に入りて、哲學を脩
 めたり。かれは宗教哲學に志し、吾れは美學と文明史に
 力めたり、かれが顛脱の才を以て、われの魯鈍の質に配
 せむは、もとよりふさはしからじ。されど嘲風われを知
 りわれ亦嘲風を知り、われはかれに於て百年の知己を得
 たりしなり。そのころのかれは、今のわれと同じく、妻
 なかりし。されば山嶺水涯、憂を紓べ神を養ふに於て、
 彼れと吾れとは多く其行をともしたりき。吾れ病みて
 床にあれば、かれ朝夕われを顧みき。われ旅に病を養へ
 ば、かれ三亭の路を遠しとせずしてわれをたづぬ。わが

嘲風に負ふところ何をもちたへむや。

嘲風來りてわれ『はいね』に背むくこと幾日。嘲風わが爲に學室を言はず。われ嘲風の爲に烟霞を説く。月のゆうべ、伊豆山の古堂に嘯き、花のあした、茂木の山莊におどづる。都には得がたき樂なりき。

嘲風『ぐるるばるちえる』が悲曲『さつぽお』の一卷を携へたり。

熱海より南のかた、にしきの浦をつたうて網代のみなとに連る所の一角、之を魚見が崎と名く。嶄然海を抜くと一百丈、斷崖直に下りて斧もてけづりたらむが如し。

ある日の夕、われ嘲風と共にこゝに上りて『さつぽお』を読む。是女詩人が入水せしと傳ふる『りかであ』の岩は、是魚見がさきのそばにも似たらんかと想ひたればなり。

あゝさつぽおよ。なが往にし日の幾千とせのあとに、われあるとをなは知るや、『れすびあ』の事はふりたるまゝに知らねども、われはなが名をきけば新しき哀れを覺ゆるなり。世におなでの哀れは多かれども、思ひはいづれひとつ魂に、うつる戀路の影とかや。己れもひとも得しらぬ思ひに、心をやふりて、一山おろしに跡も無き、東岱前後のけふりと立のぼる、あへかなる人の數は、あ

はれ、何人の罪なるか。おもへばまゝならぬ世なりけり。
偽り多き世なりけり。

あゝ『さつぽお』汝はたぐひ無き詩人なりき。其奏づる琴
にはうつし世ならぬ響を宿し、其歌ふ歌には天上の聲あ
りき。『へらす』の人々は、なを詩神の列に加へて『おひゆむ
ふ』のやしるに祭りにき。されど其最後の幸は汝にあらざ
りき。

『さつぽお』は人の子なりき。人の子として戀てか者に憧
れき。まことなき人はかれを愛し、まことなき愛はかれ
をなやましき。あはれかれが望みたる幸福は、人間のも

のにてはあらざりし。かつてまことを誓ひてし人を抱け
ば、胸に蛇ありてかれを死ぬべうかみぬ。不信充ち虚偽
みなぎる。かれ泣て悲めども時すでにおそし。『ふあおん』
はかれを欺き、『みれつた』はかれをうらざりぬ。

かれ乃ち夜叉となりてし首をとれり。かれは人の子な
りければなり。されど事果さざりき、瞋恚の炎胸に燃え
て、かれ將に悪魔とならむとするとき、天上の光かれが
胸にかゝやきて、かれは是世の人に非ざりき。かくてか
れが最後の跡は『りゆかいであ』の巖頭にのこれりき。

あゝ偽信天をひたす是濁世に、われはうたゝ『さつぽお』

を哀しむの情にたえざるなり。『さつぽお』ゆいて幾千年、
星うつり物かはれども、世のいつわりも今もなほ昔の如
くなる。すまじきものは戀なりけり。

世にくるしきとは澤なれど、神かけて望をたきしその
人の、まさなうも卑しきさがを表はせるを見むほど、苦
しきはあらずかし。わが戀人の偽はりを見むよりは。む
しろわが身の死にたらむかた、いかにほるかに幸なるべ
きぞ。『さつぽお』の死や晩かりし。

日は西にかたふきて、海づらひろくかがやきわたる。
われは思に沈みてがけの上に坐しぬ。見わたすかぎりい

あなたより、静かにゆるやかなるうねりの岩ちかくうち
寄するさまは、われに一種のおどろかなる感情を起さし
めぬ。何處よりとも無くわが耳ちかくさいやくものあり。
起ちて脚底をみおろせば、名にし負ふ魚見か崎の深淵は、
暗々としておろちの口を開きたらむ如し。われは慄然と
して覺えず巻を落したりき。
空には三日月の光あり。われ天を仰で嘆息するもの多
時。これよりわれは永く『さつぽお』を讀まざりき。

われかつて友なる詩人に問ひけらく、おん身が麗はし

きことばもて歌ひよめりしかの美はしき乙女はいかにせし。おん身の眼にはなと光無きや。友の答へはまことに哀れなりき。

いなどよ、かの光こそ人の信と共に失せしなれ。胸にほのおの消えたればうたひし歌はかへらぬ戀の灰なるよ。かれは『さつぽお』にはあらざりき。

十國峠の登臨はこよなう壯快なる遊びなりし。是峠は函嶺より天城につらなる、所謂富士火山脈の一峰にて、いたゞきに上れば、關の東西より豆州の沖かけて、十國

五島をながめ得べしとぞ云ふなる。ある日の空はれわたるにわれ嘲風とこゝにあそびぎ。

山のいただきは熱海より五十丁をいでざれば、いたう高しと言ひがたし。されど相駿二州にまたがりて、北は足柄函根富士より、南は天城神並より大島三宅の山々をのぞみ、東は江の浦しづ浦を眼下に見おろし、名にし負ふ田子の浦つたひに、清見が關より三保の松原かけて、はるかに遠江なるおまへが崎にいたるまで。西はまなづるが崎のあなた、小田原、こふづこゆるぎの磯べにそうて、江のしま、鎌倉の山々より、田越三崎のはてにいたるま

で、さがみ灘をつゝみてかすかに安房かづさの遠巒をのぞむ。形物の壮大、たぐらべきものなし。

ここに美はしきは、江の浦より清水にいたるまでの田子の浦のけしきなりけらし。富士の裾野を縫へる小松原の濃きみどりなるが、かむばら、興津わたり、淡きむらさきにうすれゆけるさまなむと、心ゆくばかりうれしく、天つ乙女のあまくだりけむ、三保のまつ原の春がすみにかすめるが、此世ならず見ゆるも床し。仰げば高き富士がねの千古の姿は、言ふもあるかや。あゝ誰がつくりなしけむ自然のうるはしさよ。如何なれば人のみぞかくは

けがれたる。

函根の一峯に雲起りぬ。はじめは膚寸の大きさなりしが、谷ひらけ風加はりて漸やくひろがり、はては八峯の全面を掩ひて、蔚然として西の方にたなびきぬ。愛鷹のみねにかゝるころ、富士ねろしにさからひたるにや、雲行忽ち天に向ひて、劔拔萬丈、二山の間、白雲の壁を築けり。其頂き山風に散じて、満天を覆ひ、濛々として咫尺をわきまへず。われは衣襟をあはせて凝眸多時、嘲風杖を揮て天を劃し、快哉を絶叫するごと三たび。しばらくにしてそら晴れて函嶺の崔巍、芙岳の清容、もとの如し。満天

の雲霧われそのいづこにゆきたるやを知らず。
あゝ天地風雲多し、人間なにぞ涙のしげきや。

嘲風われと居ること二旬、かれ事をもて都にかへり、
われ復た『はいね』と残りぬ。

わが隣室に少女あり、旅窓のつれづれを慰めむとて、
われに水仙花を送れり。われうつわに水さして朝夕にて
れを養ひしが、幾くもならずして萎みき、

水仙花、水仙花、など凋みたる。わがこゝろさしの足
らずてか。なが思ふことの残ればか。

おゝおろかや、思の根に生おればこそ、色も香もある
なれ。などあだひどの手にやしなはるべき。などあだひ
どの爲にかたちつくるべき。

水仙花、水仙花、世はにこり、人はけがれたり。なが
生ひさかふべき。野邊には是世ならぬ露ありや。われに
はうらみあり。ひどにはわらひあり。世には耻なるもの
無し。神のみくにの遠ければ、悔ひ改めむすべも知らず。
あゝわれや汝にたぐうべきか。

哀れなる水仙花は、聲なくして終に凋み果てにき。

彌生のはじめわれ熱海を去りて、清見か關の古跡をと
ひぬ。

松風遠く吹き合せて、波の音も幽なる物思ひまさる夕
べなりき。われはひとり宿を立ちいで、三保の松原にあ
そぶ。入日の影はくもにのみ残りて、月未だ上らず。田
子の浦曲の夕なぎに、千鳥の聲もいとまれなり。江尻、
しみづをはやすきで、龍華寺の輪塔を右手に見つ。袂に
さむき山れるしに、入相の鐘を吹きおくりて、はつ春の
哀れ一しほ深くや。三保にたどりつけるころは、月やう
やく上り、清見瀉の水煙は關路はるかにたてこめて、富

士の高根に雪の色しろし。見わたせば一帯の松林、木ぶ
かくも生ひ繁るかな。木立のふるへる月のあかりに、残
ひの雪の色さへて、杜の下道杳かなる、霞に落つる影も
無し。波の音やうやく近くして、われは羽衣の松にそう
て立ちぬ。

羽衣の松は、わが年久しく思ひこがれしものなりき。
よしさらば、こよひ月とともに立ちあかさむかな。

松は早く枯れて、幹のやれたるが残り。そのもとに
ゆかりを誌せる石ぶみありしが、月の光おぼろにして見
えわかず。あはれ波の音と松風のみぞ、今も昔にかはら

ざりけめ。

われは夜もすがら松のてかげに泣きくらしき。そのな
 にゆえなるを覺へざりき。頼りなき身のたゞひとり、す
 るがなる三保の松原に泣きあかすよと思へは、われは涙
 のながるゝを忍びあはざりしなり。吾れ泣けばとて、
 誰か哀れと見るべきぞ。われ笑へばとて、誰か樂しと見
 るべきぞ、ひろき天地の間にわが胸の琴は群をはなれし
 雁がねの、たぐひなき、寂しき響きすなり。われはたゞ
 かく思ひて覺えず號哭しき。
 想おもひかし、われにもあまつ乙女ありき。されど其乙

女はまことあるものには非ざりし。かくてあだなる思ひ
 に吾が胸はやぶられき、いえざるべう傷られき。よろづ
 のさいはいはかへらざるべう吾れを去りき。

月は半天にのぼりて、地には人のけはひだにあらず。
 あゝ月よ、長へに其歩みを止めよかし。永久の夜の是世
 界を覆ひつゝめよかし。風よ吹け、波よくだけよ。松は
 其ひゞきをならせよかし。かくて人間の聲を天籟の中に
 埋り了れよかし。

夜しづかにしてわが聲は遠く松原のあなたにひゞきわ
 たれり。されども月にうつれる吾影はひとつなりき。

是夜夢に天女を見しがかれ羽を持たざりき。そのしる
 き百合の如き指もて、わが胸を抑へしとき、われはこど
 ばなく泣きくづをれて、このまゝ露となりても、解けよ
 かしと願ひぬ。されどわが耳にさゝやけるかれが言葉は、
 われを咀へるものなりき、さめてのち、われ天女の名を
 問はざりしを悔みぬ。

清見が關の幾夜はかゝる思ひにあけたりき。彌生もな
 かばすぎて、花やこの世の樂しき時を、われはまたあて
 なき旅にうきみやつしぬ。あるは靜浦のほとりにさす
 らひて、櫻がしまの遺韻をたづね、あるは伊豆の山にわ

け入りて、修禪寺に薄倅將軍の墓をとふらひ、ゆきく
 てうづきのはじめ、湘南に入りて田越の里に客となりぬ。
 あゝわれやいづこに我満足の地を求むべきか。

嘲風、芥舟、都より來り訪ふ。われ又『はいね』の外に友
 を得たり。薄暮潮に乗じて海に漕ぐ。嘲風櫓をとりて立
 ち、われ舳によりて『はいね』を讀む。芥舟舷をたゝいて是
 に和す。されど三たりの感ずるところ相同じきを得べき
 か。」

半、歳、の、漂、浪、に、病、い、え、た、れ、ど、も、わ、が、心、の、き、ず、は、い、つ、し、
 か、新、し、き、痛、み、を、感、じ、そ、め、ぬ。わ、れ、つ、と、め、て、笑、へ、り、人、は、
 そ、の、笑、の、如、何、ば、か、り、苦、し、き、か、を、し、ら、ざ、る、な、り。
 飛、陽、つ、な、き、が、た、く、流、光、さ、い、へ、が、た、し。嘲、風、佳、耦、を、む、
 か、へ、て、室、に、芬、蘭、の、に、ほ、ひ、あ、り。わ、れ、殘、燈、に、む、か、ひ、孤、影、蕭、
 然、と、し、て、今、も、尙、ほ、は、い、ね、を、讀、む。

Einsam klag ich meine Leiden

Im vertrauten Schoss der Nacht;

Krohe menschen muss ich meiden,

Pfeifen sehen, wo Freunde lacht.

Einsam fließen meine Thränen,

Fließen immer, fließen still

Doch des Herzens brennend Sehnen

Keine Thräne löschen will.

(はつ夏のしめやかなる、夕相摸なる田越の里にて。三十年六月)

わがそでの記終

27/12/40

明治卅一年十二月廿八日印刷

明治卅三年三月三日發行

定價金參拾錢

版權
所有

著者 高山林次郎

發行者 大橋新太郎

印刷者 松本魁

印刷所 全國文社

發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

東京市日本橋區本町三丁目八番地

全 京橋區宗十郎町十五番地

全 京橋區宗十郎町十五番地

大和田建樹君編

謠曲文粹

全一冊洋裝袖珍
紙數四百頁以上
正價三拾五錢
郵税六錢

其文は金玉、其曲は錦繡、誰か謠曲を一讀して三嘆せざるものあらんや、大和田先生今其文中に就き粹の粹なるものを抜き、之を四季戀雜の六種に類別して一々に題を設け、文の妙處に批圈して味ふべく誦すべき要點を示されたり、讀者若し夫れ巻首に掲げたる、謠曲の季別、謠曲の國別、謠曲の古名、謠曲作者類別等を一覽せば、更に便益を得給ふ事多からん。

大和田建樹君編

參版

補增謠曲通解

全壹冊背皮上製
定價 壹圓八拾錢
目方 六百 匁

其文は自然、其意は幽玄にして、神韻の掬すべきは謠曲にありとは、大和田先生の持論なり、而して先生が謠曲文學の紹介者として、獨特の手腕を有せらるゝは世人皆知り、此書は現存の謠曲を悉皆網羅して註釋を附し妙處を示すと丁寧反覆、而して専ら通俗を主とす。一讀以て神道佛法を學ぶべく、以て歴史故實を諳すべく、以て詩歌文章を知るべく、以て名所舊跡を探る可し。

齋藤綠雨君著

あられ酒

全壹冊洋裝美本
正價 金廿五錢
郵税 金六錢

觀想精緻、文章洗煉、而して一綠雨氏の文にあらずや。小説種警抜の妙を有するもの、是れ一冊子を爲す。社會百般の現象は、悉く捉へ及隨筆を來りて、言々句々人の肺腑を刺し、嬉笑怒罵筆に隨つて紙面に現はる。而して美麗なる袖珍本なれば之を携帯するに頗る輕妙なり。

水谷不倒君編

義太夫百番

全二冊洋裝美本
一月下旬發行

本書は古來諸家の傑作になれる、淨瑠璃義太夫の名文中より新に傑作百番を撰出し、水谷不倒君が親密なる校訂と解釋を附せられしものなれば、實に斯道者の寶鑑のみならず文學家の最も稱愛すべき要書なり、請ふ續々愛讀あらんことを

文學士 大町桂月先生著 第三版

美文韻文 黃菊白菊

全壹冊洋裝頗美本
正價 參拾錢
郵稅 六錢

桂月先生の文は、變節を動かすこと已に久し。悲慨の聲を發しては、秋風の老松に激するが如く。哀痛の音を吐きては、孤猿の幽澗に叫ぶが如く。句々血を吐き、字々珠を綴る。麗くして沈痛、優にして豪宕、洵に是れ一代の才筆、文壇の珍品、一讀すれば人の思を清くし、感情を純潔ならしむ。美文と韻文とを學ぶ者の模範となすに足る。讀書家の燈下、この絶好可憐の冊子なかるべからず。

谷 信次君編

月の光

全壹冊洋裝袖珍
紙數 貳百七拾餘頁
正價 金拾八錢
郵稅 金四錢

天文●地文●歴史●地理●文學●宗教●風俗●歌謠等の各方面より玲瓏中天に輝く所の月を観察して、之に對する邦人の思想●風習●故事●美文等を綜合し、而して此一巻寸珍の書に收め、加ふるに幾多の精畫を挿入して、以て文字外の清趣を發揮す。

鹽井文學士 武島文學士 大町文學士合作 (第七版)

美文韻文 花紅葉

全壹冊洋裝
總價 金卅五錢
正價 金卅一錢
郵稅 六錢

鹽井雨江、武島羽衣、大町桂月の三文學士の小品、又は新體詩三十餘篇を輯録したるものにして、雨江氏子の遒勁なる、羽衣子の雅澹なる、桂月子の華瞻なる、まことに花紅葉を一時に看るの感あり。つれづれの好伴侶此上やある。

大和田建樹君著

(第四版)

散文韻文 雪月花

全壹冊洋裝
總價 金卅五錢
正價 金卅一錢
郵稅 六錢

其文は清楚婉麗、趣味掬すべく。其歌は優雅流滑、奇想天外より來りて、句々風を生じ、言々花を降らすものは、大和田先生の筆と爲す。此編收むることは、近作數百篇、蓋し落葉振はざる今日文學界中の旗鼓たるものは、此書を措きて他に又た何かある。

宮中御歌所寄人中邨秋香先生著

(紙數八百餘頁)

六

新體詩歌自在

全壹冊總クローヌ金字入
正價 金壹圓
郵稅 金拾貳錢

著者の歌文に深き、既に江湖の熟知する所、而して新體詩に於て、特得の文藻と滿腹の意見とを有せらるゝは、その斯學を以て御歌所に奉仕せらるべし。本書は我邦**歌詞の起原沿革**より**新體詩の發達**に論及**類題**を設**作例**を示し、殊**新事物**を題としたる如きは、他に其比を見ざる所、眞に書名に背かざる良典なり。

佐々木信綱君著 總クローヌ洋裝

下田歌子君著 和裝大判美本

和裝大判美本

●增補 詠歌自在

正價金一圓 郵稅八錢

●詠歌之棗

正價金三拾五錢 郵稅八錢

佐々木信綱君著

總皮本綴金字入 正價金一圓廿錢 目方四百匁

大和田建樹君著

洋裝大判並製

●歌

の 棗

正價金一圓廿錢 目方四百匁

●應用歌學

正價金拾五錢 郵稅六錢

博文館編纂

(三十二年一月新版)

萬民 机 上 日記

大形正價三拾錢 郵稅八錢
中形正價二拾錢 郵稅六錢
小形正價拾錢 郵稅六錢

世上種々の日記帳あれども平生机上に備へ置きて隨時の用に供するものあらず、これ新に本館が是の日記を調製せし所以なり、古人坐右銘、年中行事等荷も吾人に利益を與ふべき事項は總て卷頭に收め、以て完全なる日記帳を編纂す、眞に是れ吾人の備忘録なり。

博文館編纂

(三十二年一月新版)

萬民 會 計 日記

大形正價三拾錢 郵稅八錢
中形正價二拾錢 郵稅六錢
小形正價拾錢 郵稅六錢

社會の人事頻繁なるにつれて、金錢出入の帳簿文自ら完全便利のものを用ひざるべからず、此會計日記は和洋帳簿の諸式を參酌して、新たに本館の作り出したる重寶なる日記にして、江湖一般の家に於て日用缺くべからざる要品なり、請ふ續々購求あらんことを。

七

新年新刊の好冊子

毎一月一回

世界歴史譚

- 第一編
- 第二編
- 第三編
- 第四編

釋孔耶 耶ハ

ンニバル

迦子蘇
……文學士
……文學士
……文學士

高山林次郎君著
吉國藤吉君著
上田敏君著
大町芳衛君著

全廿四冊 每編洋裝美本
正價一冊拾三錢
郵税一冊四錢

毎一月一回

世界お伽噺

- 第一編
- 第二編
- 第三編
- 第四編

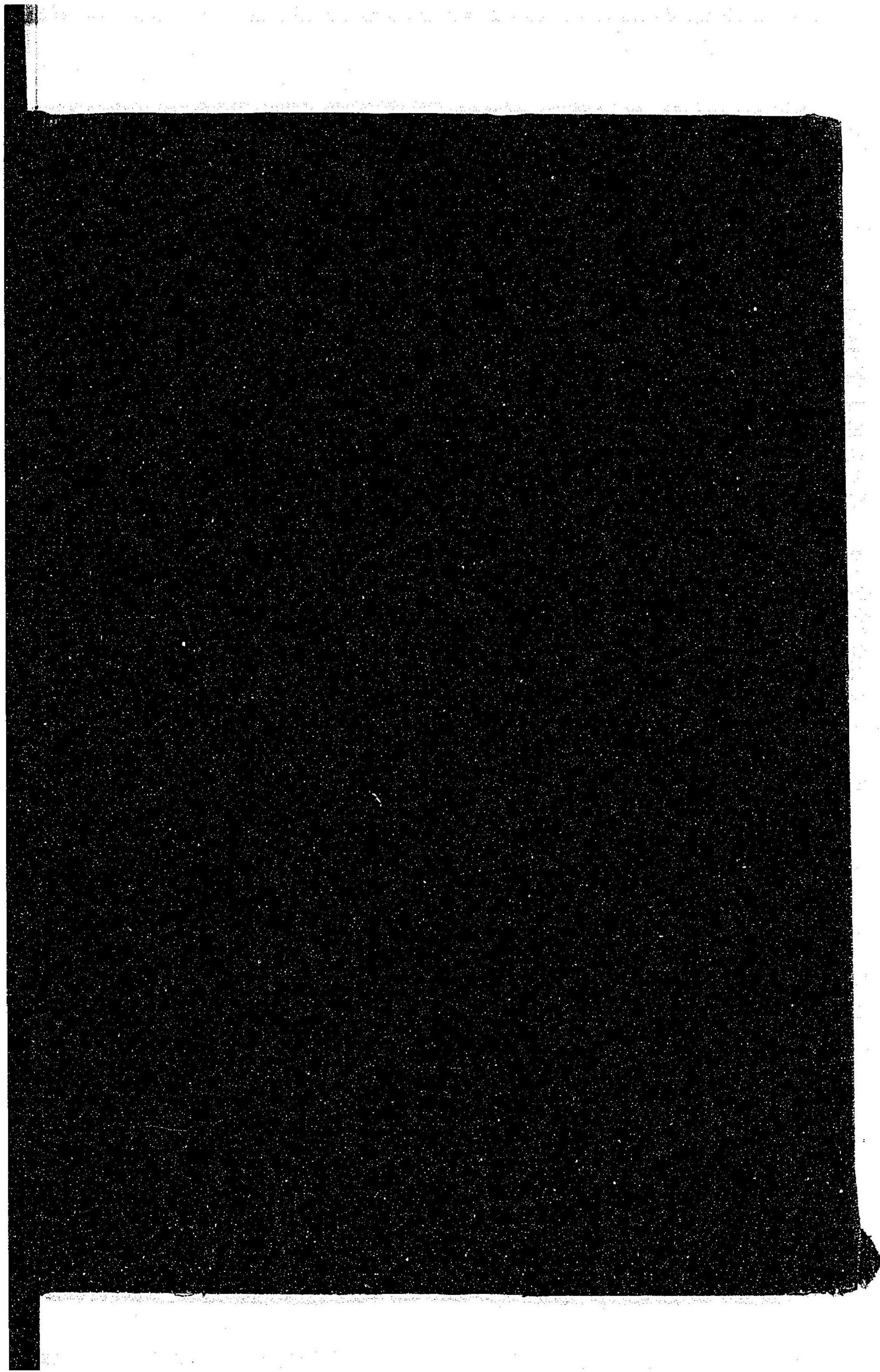
世界の色の特
珊瑚島

始附人間の始
石附指南車
山附帝釋天
島附九木船

中村不折畫
梶田半古畫
水野年方畫
富岡永洗畫
(編谷巖波小)

全廿四冊 每編洋裝美本
正價一冊七錢
郵税一冊四錢

71
138



71
438

102130-000-7

71-438

時代管見

高山 樗牛

(林次郎) / 著

M32

EAF-0122



